

## 越中国府関連遺跡調査概報VIII

—平成7年度、伏木古国府5号線マイロード事業にかかる調査—

1996年3月

高岡市教育委員会

## 例　　書

1. 本書は、伏木占国府5号線マイロード事業に伴う、  
越中国府関連遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 当調査は、高岡市建設部道路建設課の委託を受け  
て、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査地区は、富山県高岡市占国府である。
4. 調査関係者は、次のとおりである。  
  
文化財課長：田村晴彦  
(埋蔵文化財係)  
主幹兼係長：石油正雄  
係員：山口辰一  
係員：根津明義  
係員：荒井 隆
5. 本書における遺構記号は、次のとおりである。  
  
S B - 建物址  
S D - 池  
S F - 道路址  
S K - 土坑
6. 本書における遺物番号は、次のとおりである。  
101～土師器（ロクロ使用）  
201～土師器（非ロクロ）  
301～須恵器  
401～古代・中世陶磁器  
501～近世陶磁器  
601～その他の遺物
7. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏よ  
り御教示・御援助を得た。(順不同、敬称略)  
大橋康二 (佐賀県立九州陶磁文化館)  
土山照慎 (勝興守住職)  
西井龍徳 (富山考古学会)  
西野龍雄 (沟町自治会長)  
古岡英明 (市文化財保護審議委員)  
宮田進一 (富山県埋蔵文化財センター)
8. 本書の執筆は、山口が担当した。

## 調査参加者名簿

### 発掘

上田工、尾山久美子、垣地慶子、門島信也  
新谷晴紀子、杉木広政、高野佳香、旅剛、塚原望  
寺井久子、上合良子、中村恭子、庄沢隆太郎  
前田武蔵、木外一郎、宮下奈津子、山城一夫

### 整理

東加世子、小林聰子、尾山久美子、垣地慶子  
佐野美香、清水千鶴、新谷晴紀子、高田えみ子  
塚原望、寺井久子、上合良子、道谷美奈子  
中尾賀要子、中田郁子、中林靖子、中村恭子  
中山麻紀、橋真理子、藤城至紀子、細呂木至樹  
吉田亮子

## 目 次

例 言

目 次

I 序 説	1
II 調査の概況	7
1. 前期調査地区	7
2. 後期調査地区	9
3. 東端部サブトレンチ	9
4. 南東側サブトレンチ	10
5. 西端部北側サブトレンチ	10
6. 西端部南側サブトレンチ	13
III 遺 構	14
1. 掲立柱建物址	14
2. 道路址	14
3. 土坑	14
4. 溝	16
IV 遺物、土器陶磁器類	17
1. 土師器〔1〕	17
2. 土師器〔2〕	17
3. 須恵器	18
4. 古代・中世陶磁器	18
5. 近世陶磁器	18
V 遺物、その他の遺物	19
1. 瓦	19
2. 土製品	19
3. 石製品	19
VI 結 語	20

## 図面目次

- 図面1 遺物実測図 土師器
- 図面2 遺物実測図 土師器
- 図面3 遺物実測図 爐窓器、古代・中世陶磁器
- 図面4 遺物実測図 近世陶器
- 図面5 遺物実測図 近世陶器
- 図面6 遺物実測図 近世陶器
- 図面7 遺物実測図 瓦
- 図面8 遺物実測図 土製品、石製品

## 図版目次

- 図版1 遺構 1. 調査地区遠景（西上方）  
2. 調査地区遠景（東上方）
- 図版2 遺構 1. 前期調査地区全景（東上方）  
2. 前期調査地区全景（東）
- 図版3 遺構 1. 前期調査地区全景（西）  
2. 前期調査地区近景（南東）
- 図版4 遺構 1. 後期調査地区全景（東）  
2. 後期調査地区全景（北東）
- 図版5 遺構 1. 後期調査地区近景（北西）  
2. 後期調査地区近景（西）
- 図版6 遺構 1. 後期調査地区西側近景（東）  
2. 後期調査地区西側近景（北）
- 図版7 遺構 1. 東端部サブトレーンチ全景（北西）  
2. 東端部サブトレーンチ全景（南西）
- 図版8 遺構 1. 東端部サブトレーンチ東壁断面（西）  
2. 東端部サブトレーンチ東壁断面細部（西）
- 図版9 遺構 1. 東端部サブトレーンチ遺物出土状態南側（北東）  
2. 東端部サブトレーンチ遺物出土状態中央（北東）
- 図版10 遺構 1. 東端部サブトレーンチ遺物出土状態細部（南東）  
2. 東端部サブトレーンチ遺物出土状態細部（北東）
- 図版11 遺構 1. 東端部サブトレーンチ遺物出土状態細部（南東）  
2. 東端部サブトレーンチ遺物出土状態細部（北東）

- 図版12 遺構 1. 南東側サブトレンチ全景（西）  
2. 南東側サブトレンチ全景（東）
- 図版13 遺構 1. 西端部北側サブトレンチ全景（南東）  
2. 西端部北側サブトレンチ全景（北東）
- 図版14 遺構 1. 西端部南側サブトレンチ全景（北東）  
2. 西端部南側サブトレンチ全景（南東）
- 図版15 遺構 1. 西端部南側サブトレンチ全景（東）  
2. 西端部南側サブトレンチ遺物出土状態（東）
- 図版16 遺構 1. 玉石敷きの路面細部状況（北東）  
2. 玉石敷きの路面細部状況（北西）
- 図版17 遺構 1. 玉石敷きの路面細部状況（北）  
2. 玉石敷きの路面細部状況（北）
- 図版18 遺構 1. 玉石敷きの路面遺物出土状態（北）  
2. 玉石敷きの路面遺物出土状態（北）
- 図版19 遺構 1. 土坑SK10全景（北）  
2. 土坑SK10遺物出土状態（北西）
- 図版20 遺構 1. 土坑SK11遺物出土状態（南）  
2. 土坑SK11遺物出土状態（南）
- 図版21 遺構 1. 溝SD02遺物出土状態（南西）  
2. 溝SD02遺物出土状態（西）
- 図版22 遺構 1. 溝SD02遺物出土状態細部（東）  
2. 溝SD02遺物出土状態細部（北）
- 図版23 遺構 1. 溝SD04炭化物層出土状態（西）  
2. 溝SD04炭化物層出土状態（北）
- 図版24 遺物 土器
- 図版25 遺物 1. 白磁  
2. 伊万里、瀬戸美濃
- 図版26 遺物 1. 越中瀬戸（内面）  
2. 越中瀬戸（外側）
- 図版27 遺物 1. 越中瀬戸（内面）  
2. 越中瀬戸（外側）
- 図版28 遺物 越中瀬戸
- 図版29 遺物 唐津
- 図版30 遺物 唐津
- 図版31 遺物 1. 唐津（内面）  
2. 唐津（外側）
- 図版32 遺物 1. 唐津（内面）  
2. 唐津（外側）

図版33 遺物 1. 唐津（内面）

2. 唐津（外面）

図版34 遺物 1. 唐津（内面）

2. 唐津（外面）

図版35 遺物 1. 唐津（内面）

2. 唐津（外面）

図版36 遺物 1. 唐津（内面）

2. 唐津（外面）

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図（1／5万）	1
第2図 調査地区位置図（1／5,000）	2
第3図 調査地区配置図（1／400）	4
第4図 調査地区全体図（1／400）	4
第5図 造構図（1／200）	5
第6図 調査風景	7
第7図 東端部サブトレント土層断面図（1／40）	8
第8図 東端部サブトレント実測図（1／80）	10
第9図 南東側サブトレント実測図（1／80）	11
第10図 西端部サブトレント土層断面図（1／40）	12
第11図 西端部サブトレント出土土器陶磁器類一覧（1／6）	13
第12図 道路址S F01実測図（1／200）	15
第13図 上坑SK11実測図（1／40）	16

## I 序　説

### 遺跡概観

越中国府関連遺跡は、高岡市街地の北側、富山湾へと注ぐ小矢部川の河口左岸の伏木台地に位置している。伏木台地は標高273mの二上山の東側に拡がる台地で、上位と下位の2つの段丘から構成されている。この台地全体が遺跡地帯（埋蔵文化財包蔵地）と判断している。

この越中国府関連遺跡と総称している遺跡は、越中国府関連遺跡推定地、県指定史跡越中国分寺跡、越中国分尼寺跡想定地を中心に、これに関連する施設や集落遺跡を含むものである。また国府以前の古墳群や寺院跡、以後の城郭跡等も当地内に所在している。



第1図 遺跡位置図 (1/5万)



第2図 調査地区位置図 (1/5,000)

### 越中国府

越中国府は、下位段丘の中央部分に存在していたものと推定されている。現在浄土真宗本願寺派の大寺院「勝興寺」の境内地となっているところである。

越中国分寺跡は、下位段丘の北部に比定されている。国府跡推定地の北西約600mの地点である。現在、真言宗の寺となっている国分寺（旧称薬師堂）の境内地を中心に寺域が想定されている。またこの境内地、約1,530m<sup>2</sup>が越中国分寺跡として県の指定史跡になっている。

越中国尼寺跡については、諸国の実例から国府跡や国分寺跡の周辺に所在していたとする見解が中心である。具体的な場所については、数箇所ある古瓦採集地の内、一つを当てる説がある。

越中国・国府を特徴付けることとして、万葉の歌人大伴家持の存在がある。家持は越中国司として当地に天平18年（746年）から天平勝宝3年（751年）までの5箇年間任し、数々の歌を詠んだことは著名であり、このことから勝興寺を中心とする伏木地区が万葉の故地の一つとされている。また、国司館跡想定地は、勝興寺の東側一帯とされている。

### 勝興寺

天正9年（1581年）、織田信長方の武将佐々成政は越中へ派遣された。越後の上杉勢や、勝興寺や瑞泉寺を中心とする越中の一向一揆勢の制圧を行い、越中国の全域を支配したが、天正10年（1582年）の本能寺の変

以降、豊臣秀吉に反する勢力に組した成政は、次第に窮地に追い込まれていった。

現在淨上・真宗本願寺派の勝興寺は、二・上山東麓の伏木古国府に位置するが、当地に寺地を得たのは、天正12年（1584年）である。これは成政と二・上山の守山城を拠点とする神保氏姫との計らいによるものである。秀吉は越中に進攻する直前、天正13年（1585年）に勝興寺に禁制を与え、さらに成政に替わり越中を支配した前田利長からも、同時に禁制を与えられている。その後、前田家の加賀藩、本願寺、公家との密接な関係、庇護があり、基盤を確立すると共に、大伽藍を建築し維持して、今日にその歴史や宝物を伝えている。

勝興寺の前身は、加賀との国境に設けられた土山御坊（福光町土山）である。その後高木場御坊（福光町高森）へ移り、さらに西畠波都木友村安養寺（小矢部市末友）へ替わっている。この間寺を「勝興寺」と変更している。伏木古国府に移る直前は、戦火により、寺地、伽藍共消失している時であり、上記したように、1584年以降、現在地に伽藍や寺内町を設立したものである。

現在の勝興寺は、周囲を土塁や濠で囲まれており、城郭寺院とされている。これについては、1584年以前に当地に城郭（地名より「古国府城」とされている）があり、そこへ勝興寺が設置されたとするのが通説の見解と理解されるが、寺院城郭勝興寺として、周囲の土塁や濠が直接勝興寺に関係するものとの考えもある。

勝興寺の伽藍は東面しており、総門から東北東方向へ旧参道が延びている。ほぼ真東へ延びて、JR水見線の伏木駅に至る道は、明治30年から始まる工事による切通しの道である。

#### 調査に至る経緯

高岡市の北部に位置する「伏木地区」は、奈良時代に越中国府が設置された所であり、また港町としても栄えてきた所である。しかし、近年はやや活気が失われ、経済力も低下してきている。このようななかで、本市においては「高岡市北部地区開発整備基本計画」を策定し、当地区の恵まれた自然資源を活かし、歴史的文化的遺産の掘り起こし、地域の活性化を目指しているところである。具体的には『歴史と未来のロマンがあふれるまち』を目指して地区全体を5つのゾーンに分け、各事業を実施してきている。

一方、「マイロード事業」は「特に地方の個性と創意工夫を活かした地域振興施策について、関連する道路整備を重点的に実施し、心のよりどころとなるような道路を創出することにより、魅力と活力ある地域づくりを推進することを目的とする」事業である。

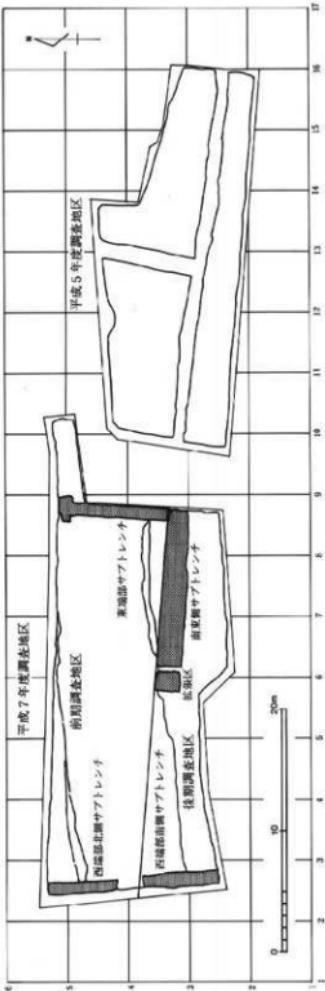
伏木地区の中心部に位置する勝興寺周辺は近世寺内町の様相を今日まで止めると共に、万葉の故地の中核部分であり、この由緒ある歴史と文化にふさわしい町並み景観の創出は必要なことである。そこで、勝興寺の門前通りを「マイロード事業」に組入れ、「万葉の歴史と文化が薫るみち」として整備を図ることとなった。この計画は「伏木古国府5号線マイロード事業」として、JR伏木駅前から勝興寺総門前までと、勝興寺総門前から南側へ折れる道を整備するものである。

勝興寺付近は越中國跡推定地であるばかりか、戦国時代の遺構等も確認される埋蔵文化財包蔵地であり、事業主体の市建設部道路建設課と協議して、工事に先立って、発掘調査を実施することになった。JR伏木駅から勝興寺総門前へ至る参道は、明治30年に開設された道路であり、その時に切り通された部分は、遺構が残っていないと判断したので、発掘調査は、勝興寺総門東側付近を中心で実施することになった。

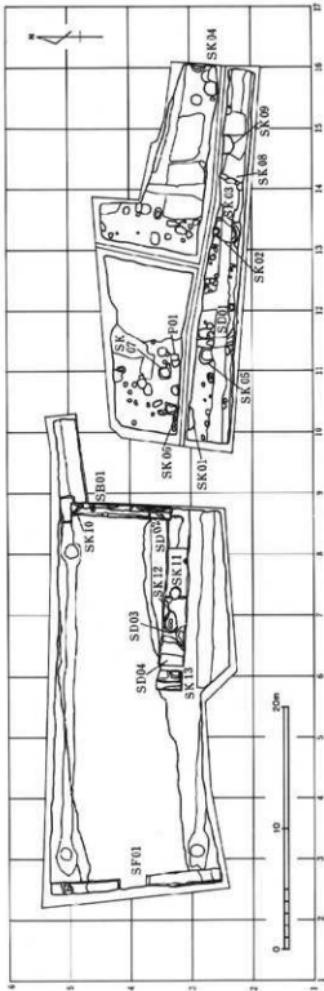
調査地区は現在生活道路であり、調査に当たって舗装面を剥がし、終了後に仮舗装する必要もあった。このことも考慮に入れて、試掘調査を実施せず、直ちに本調査にかかることにした。

調査に割ける人員等の関係もあり、平成5及び6年度の2箇年で発掘調査を実施することにした。平成5年度は予定どおり実施したが、平成6年度の調査は、諸般の都合で実施することができず、平成7年度に実施した。本書はこの平成7年度の調査を報告したものである。

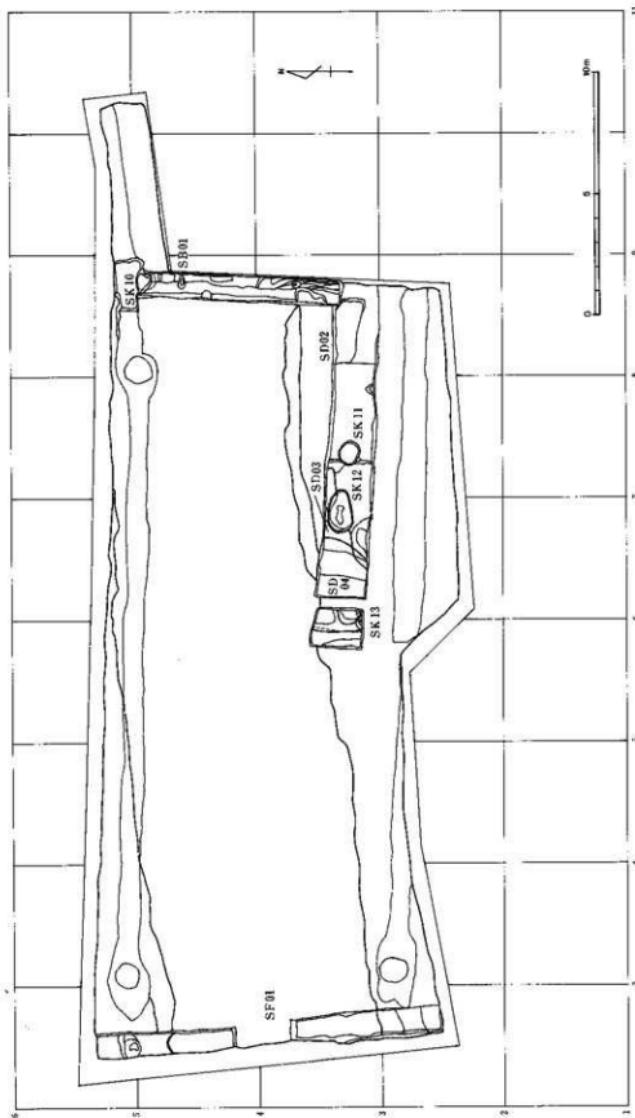
第3回 調査地区配置図  
(1/400)



第4回 調査地区全体圖 (1/400)



第5圖 連續圖 (1 / 200)



## 平成5年度の調査

平成5年度の発掘調査地区は、平成7年度調査地区的東側、中田貞酒店と仏念寺前の道路上である。平成5年8月25日から10月29日まで発掘調査を実施した。実働調査日数は22日である。発掘調査面積は290m<sup>2</sup>となつた。検出遺構は、土坑9基（S K01～09）、溝1条（S D01）である。時期的には、平安時代後期、戦国時代、江戸時代のものである。出土遺物の主体は、平安時代後期から江戸時代に至る、土器・陶磁器類であり、奈良時代～平安時代前期の遺物は少なかった。この調査については『越中国府関連遺跡調査概報VII』として報告してある。

### 調査経過

平成7年度の発掘調査地区は、平成5年度調査地区的西側、勝興寺総門の直ぐ東側の地点である。北側には、入報寺、浄光寺が位置し、南側には淨蓮寺が位置する。発掘調査は平成7年6月1日から8月22日まで実施した。実働調査日数は43日である。勝興寺への交通の妨げとならないように、調査地区を2分し、北側を前期調査として6月1日から7月17日に実施し、南側を後期調査として7月24日から8月22日に実施した。実際の掘削では、バックフォーにより表土（現在のアスファルト路面やその下のコンクリートや盛土）を除去し、これらはダンプカーに積載して除外に搬出した。人力による掘り下げの土砂も極力、場外へ搬出した。今回の調査では、勝興寺の旧参道（道路址 S F01）が現在の道路下から検出され、これを保存するため、これより下方への掘り下げは原則として実施しなかった。ただし、旧参道下の状況を把握するため、部分的に深掘り地区（サブトレンチ）を設定して調査を実施した。

### 調査面積

調査面積は442m<sup>2</sup>で、内訳は、前期調査地区が285m<sup>2</sup>、後期調査地区が157m<sup>2</sup>である。

### 検出遺構

検出遺構は以下のとおりである。

掘立柱建物址1棟（S B01）

道路址1条（S F01）

土坑4基（S K10～13）

溝3条（S D02～04）

遺構番号は、平成5年度調査地区からの連番とした。

### 出土遺物

遺物は、主に次の3時期のものである。1. 奈良～平安時代、2. 戦国時代、3. 江戸時代である。遺物の種類は以下のとおりである。

1. 土器：土師器、須恵器。
2. 陶磁器：珠洲、輸入白磁、越中瀬戸、唐津、伊万里、瀬戸美濃。
3. 瓦：古代瓦、煙瓦、赤瓦。
4. 土製品：土鍊。
5. 石製品：砾石。

### グリッド

調査地区的グリッドは、平面直角座標系に合わせた。第4図における、X=1、Y=1の地点は、原点より、西へ9.745km、北へ87.611km行った位置である。第4、5図におけるメッシュは5m四方の区画を示している。

## II 調査の概況

### 1. 前期調査地区

勝興寺総門前のアスファルト路面の参道には、中央部分に東西に走る融雪装置が埋め込まれている。これを境として、今回の調査地区的北側部分を前期調査地区として、先に発掘調査を実施した。アスファルト路面とその下に推定される盛土等をバックフォーで除去して、その下方より人力で調査。掘削する予定で開始した。アスファルト路面は順調に除去できたが、その下から、昭和30年代に敷設されたと言われているコンクリートの舗装部分が出てきたので、これも除去する必要が生じた。さらにその下から、玉石敷きの路面が検出され、この直上までバックフォーによる掘削を行い、これから下の調査は人力による掘り下げや清掃をして、調査を実施することにした。

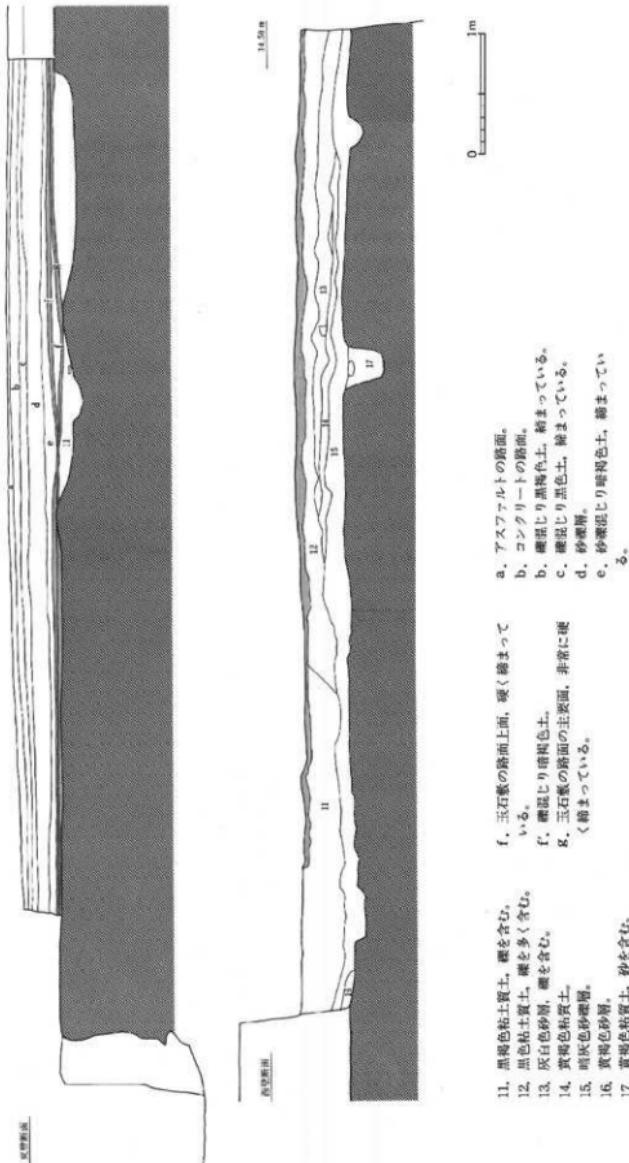
玉石敷きの路面は位置及び内容から、勝興寺の旧参道と推定されたので、これの検出に努めた。バックフォーによる表上等の除去、及び玉石敷きの路面を検出した段階で、全景写真を取り、その後、調査地区を横断して掘削する形で、東側端部と西側端部を掘り下げ、玉石敷きの路面下の状況把握を行った。この東側端部の深掘り地区を「東端部サブトレンチ」、西側端部の深掘り地区を「西端部北側サブトレンチ」と称する。これらのトレントにより、玉石敷きの路面下の状況が複雑なことが判明できた。

前期調査地区は大部分、玉石敷きの旧参道部分によって占められている。南東隅部と北西隅部は、旧参道外となっている。また調査地区的北側には、現代の排水管が東西に埋め込まれており、旧参道の北東側を切っている。

調査地区的北西側には、旧参道を一部覆う形で、土盛り及び整地がなされており、この部分に何らかの施設があった可能性が窺えた。



第6図 調査風景



第7図 東端部サブトレンチ土壌断面図（1／40）

## 2. 後期調査地区

前期調査地区は調査終了後、玉石敷きの旧参道部分を保護するため、これを山砂で覆い、この上に砕石等を入れて仮の道路とした。そして、東西に走る融雪装置の南側の後期調査地区の調査に取り掛かった。前期調査地区と同様に表土等をバックフォードで除去した。この時、中央部の融雪装置も除去した。融雪装置は今回の道路改良工事で新設するので、従来のものは不要であるので除去した。

前期調査地区的経験を踏まえ、玉石敷きの参道を検出していった。これは予想した位置で、後期調査地区的北西側で検出された。この段階で、一旦全景写真を撮影した。調査地区的南側には現代の排水管が東西に走っており、これら以外の部分は限られており、この両者の間、後期調査地区の東側に深掘り地区を設定して、玉石敷きの参道レベルより下の部分の調査を実施した。「南東側サブトレーンチ」である。また前期調査地区的西端部の深掘り地区（西端部北側サブトレーンチ）に連動する形で、西端部に「西端部南側サブトレーンチ」を設定した。

## 3. 東端部サブトレーンチ

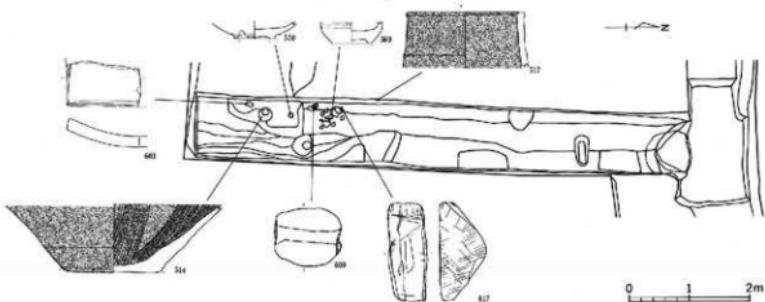
前期調査地区的東端部に設定した深掘り地区である。このサブトレーンチは、幅1mで長さ9mに亘り南北に設定したものである。平成5年度調査地区的状況により、当初玉石敷きの旧参道の下は黄褐色粘土の地山層（基盤層）と考えていたが、このように行かない部分もあることが判明した。またこのサブトレーンチの東側断面の観察によって、玉石敷きの旧参道と現在の路面との間に、幾つかの路面が存在していることを確認した。

北側は現代の排水管による擾乱となっている。さらにこの南側に円形の土坑（SK10）が検出された。この土坑は玉石敷きの旧参道の下から検出され、北側は擾乱に切られている。瓦の破片（赤瓦の一部）が出している。中央より北側で、東側の地区は、玉石敷きの旧参道下は、黄褐色粘土の地山層の平坦面が存在した。ここから掘立柱建物址の掘り方になると判断される方形の落ち込みが検出された。掘り下げてはいないが、奈良時代頃の掘立柱建物址の一部と考え、SB01とした。南側や西側全体は、溝状の落ち込みとなっている。南西側では、底面近くより、礫や陶器等が出土した。

東側の断面の観察により、玉石敷きの旧参道から、現在の路面までの道路の変遷が判明した。これによつて以下のように判断した。

- 現在のアスファルト路面。
- 道路の中央部をコンクリート路面とした段階、周辺部は礫混じりの黒褐色土で締まっている。
- 礫混じりの黒色土で締まっている。
- 砂礫層である。
- 砂礫混じりの暗褐色土で締まっている。
- 黄褐色の砂礫層であり、締まっている。この下は、直接基盤層になる部分と、間に黑色沙質土が存在する部分がある。

西側の断面は、玉石敷きの路面上まで、掘り下げてある所であり、この路面下の状況が把握された。基盤層は路面下約40cmであり、この間は溝状の遺構に土砂が堆積した部分と推定した。



第8図 東端部サブトレンチ実測図 (1/80)

#### 4. 南東側サブトレンチ

後期調査地区の東側に設定した深掘り地区である。調査地区全体から見れば南東側に位置するので「南東側サブトレンチ」と称する。幅2mで30mに亘り東西に設定したもので、さらに断面観察用のベルトを挟んで、幅2mで長さ1.5mの拡張区をこれの西側に設定した。玉石敷きの参道の南側に当たる位置である。一部この参道の周辺を切断した。このサブトレンチの南側を排水管敷設による擾乱が平行して走っている。

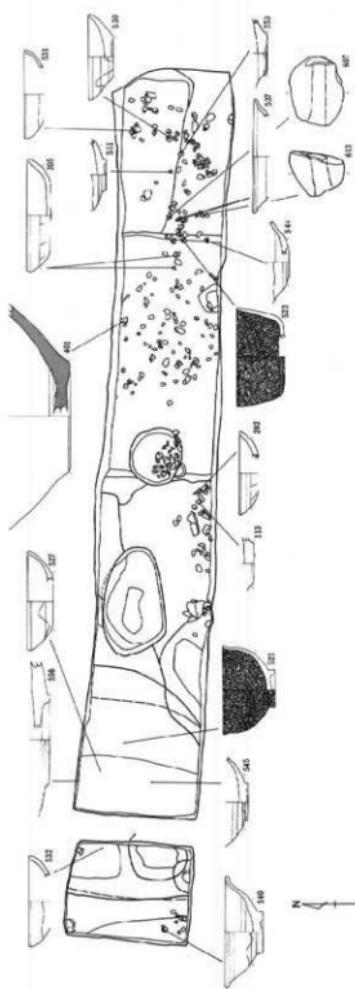
この南東側サブトレンチからは、玉石敷きの参道より古い時期の土坑や溝状の遺構が検出された。発掘区が狭いことと、遺構が複雑に絡み合っていること等により、すべて平面的に検出したわけではなく、土層断面の状況から判断したものが多い。また発掘区が限られており、それぞれの遺構についても全体を把握できたものは少ない。

#### 5. 西端部北側サブトレンチ

前期調査地区の西端部に設定した深掘り地区である。すなわち勝興寺の總門前北側である。このサブトレンチは、幅1mで長さ6mに亘り南北に設定したものである。言うまでもなく總門直前の状況を探ることを目的として設定した。總門側、西側断面で観察する限り、現在の路面下から玉石敷きの参道までの状況は、基本的に東端部サブトレンチでみてきたものと同様である。東端部サブトレンチほど各路面が明瞭ではなく、「c」「f」としたものが不明瞭であり、「d」も厚く堆積していた。

玉石敷きの参道下には、厚さ15~20cmで縦まりのある黒色粘質土が堆積していた。この土層には、土器類、土師器を中心とする須恵器が多く含まれていた。これらの土器類は2次堆積とも言うべき状態で、質、残存量とも良好なものではなかった。この土層は締まっており、盛土及び整地作業が行われたと推定できる。

この下には黒色粘質土層が厚く堆積していた。遺物は上部で上方のものが沈んだ形で僅かに出土したに過ぎず、自然の堆積土と考えた。深い所では80cmの厚さを確認しており、南側へ向かってさらに低くなっている。



[ヒット]

g. 土石礫の路面の縁切面。  
強く伸びている。

[S D02]

21. 黒褐色粘質土、黄褐色粘質土ブロックを含む。  
22. 黄褐色粘質土。

[S D04]

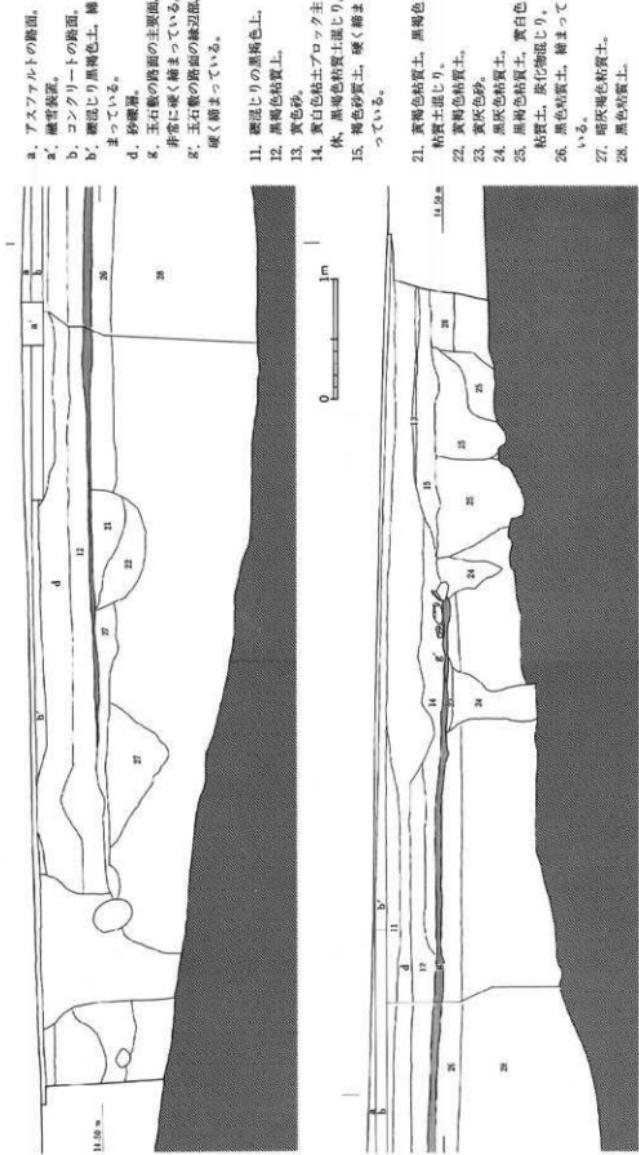
23. 黑褐色粘質土。  
24. 黑褐色粘質土、黄褐色粘質土ブロックを多く含む。  
25. 黄褐色粘質土、黄褐色粘質土ブロックを多く含む。  
26. 黄褐色粘質土。

[S D03]

27. 黑褐色粘質土、砂礫を含む。

第9図 南東側サブトレーンテ深測図 (1/80)

第10図 西端部サブトレーンチ土壌断面図（1／40）





第11図 西端部サブトレンチ出土土器陶磁器類一覧 (1/6)

た。この部分が谷部であったとしてよからう。

幅1mの掘り下げでは面的に把握することができなかつたが、断面の観察の結果、掘り方や土坑状の落ち込みが認められた。これらは北側に位置し、玉石敷きの参道より古い掘り方状の落ち込み、及び玉石敷きの参道と同時期頃の掘り方や土坑状の落ち込みである。また、玉石敷きの参道やこれと同レベルより上で、参道を一部覆う形での盛り土部分が認められ、北側から参道に一部張り出す形での施設等の存在を窺わせる。

## 6. 西端部南側サブトレンチ

後期調査地区の西端部に設定した深掘り地区である。すなわち勝興寺の総門前南側である。このサブトレンチは、幅1mで長さ6mに亘り南北に設定したものである。前期調査地区的西端部北側サブトレンチと同様、総門直前の状況を探ることを目的として設定した。断面図では中央上方に位置する融雪装置を介して南側に統く地区である。基本土層は西端部北側サブトレンチと同様である。サブトレンチの南側は排水管敷設による擾乱を受けている。

総門側、西側断面での観察では、暗褐色整地土層の下の黒色粘質土は、30~120cmの厚さで堆積しており、このサブトレンチの北側が一番深い部分であることが推察された。また掘り方及び土坑状の落ち込みが3箇所確認された。暗褐色整地土層よりも古いもの、玉石敷きの路面より古いものと新しいものである。

第11図として、西端部北側サブトレンチと西端部南側サブトレンチから出土した土器陶磁器類をまとめ示した。これらは玉石敷きの路面を断ち割る形でのサブトレンチから出土したものであり、路面形成以前の遺物である。

### III 遺構

#### 1. 掘立柱建物址

##### 掘立柱建物址 S B01

掘り方が2個確認されたのみであるが、遺構の整理上、掘立柱建物址として扱っておきたい。東端部サブトレンチの北東側、グリッドでは(8, 4)区から検出された。黄褐色粘土の基盤層を切り込む形で、黒褐色の方形の落ち込みが2個確認された。一辺約70~80cmを計り、両者の心心間は2.30mである。北側の掘り方は、西側を溝状の落ち込みにより切られている。南側の掘り方は、東側が調査地区外になる。

#### 2. 道路址

##### 道路址 S F01

勝興寺の参道としての道路址である。今回の調査地区の大半はこの道路址部分で占められている。勝興寺の総門より東側へ向かって延びている。幅8.5~9mで39mに亘り検出された。ただし、調査地区的北東側、前期調査地区的張出部は、排水置場に主に使用したので、この部分の調査は不十分である。よって明確な部分の延長は32mである。主軸は、真東に対して7度北へ偏っている。玉石を極めて硬く叩き締めて形成された参道である。側溝や縁石は検出されていない。後期調査地区から、一部縁石風なものが検出されたが、僅かであり、縁石とは認め難いものである。

この道路址は、調査地区的南東端部では、南側へ枝道として進んで行く様子が確認された。

玉石敷きの路面の直上から、近世の磁器、伊万里、瀬戸美濃が出土している。その一部は岡版25-2に示したものである。

なお、第12図の道路址と勝興寺総門との関係を示す図は、現地で計測したものに『越中勝興寺伽藍』で報告された総門の図を使用して作成したものである。

#### 3. 土坑

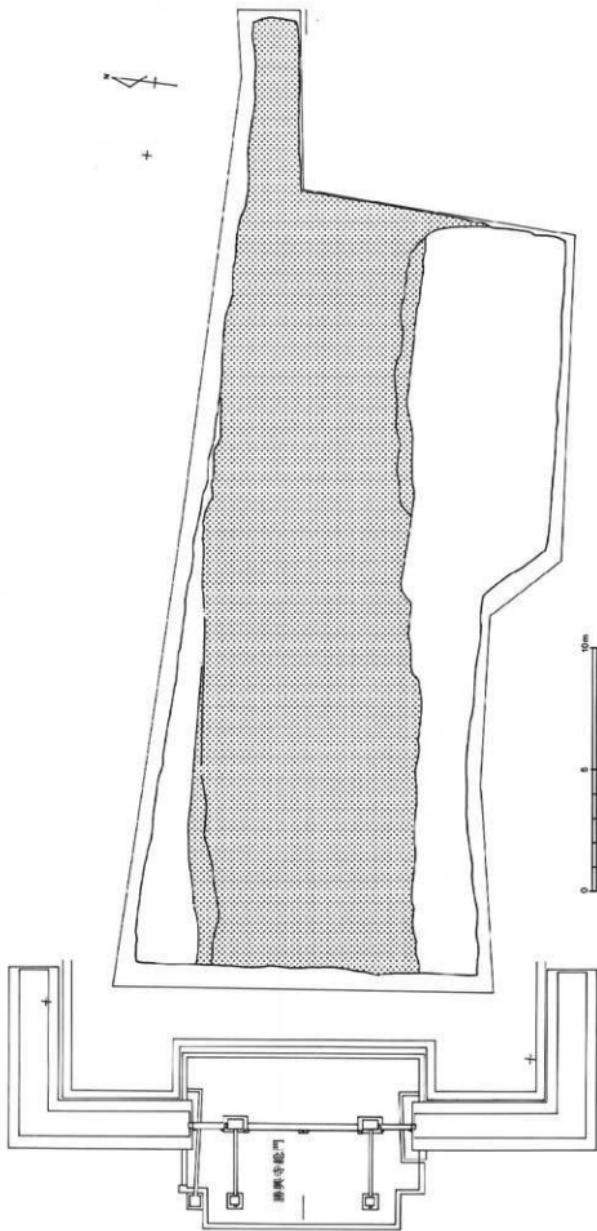
##### 土坑 SK10

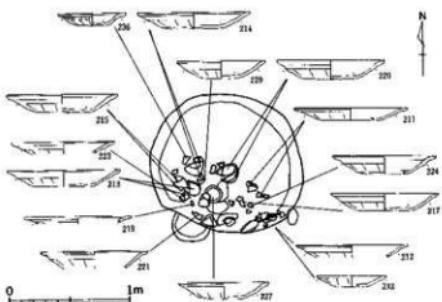
前期調査地区的東端部サブトレンチから検出された。サブトレンチの北側(8, 4)区に位置する。略円形の土坑で、規模は径98cm、深さ115cmを計る。北側は擾乱に切られている。道路址 S F01の下から検出された。赤瓦の破片が出土している。

##### 土坑 SK11

後期調査地区的南東側サブトレンチから検出された。サブトレンチの中央東寄り(7, 3)区に位置する。円形に近い梢円形の七坑で、規模は長軸96cm、短軸86cm、深さ38cmを計る。上部は溝S D02に切られており、底面近くが残存していたに過ぎない。戦国時代の土器器皿がまとまって出土している。

第12圖 通路址 S F 01測量圖 (1 / 200)





第13図  
土坑SK11実測図(1/40)

#### 土坑SK12

後期調査地区の南東側サブトレンチから検出された。サブトレンチの中央西寄り(6・7, 3)区に位置する。梢円形の土坑で、規模は長軸196cm, 短軸102cm, 深さ36cmを計る。上部は溝SD02に切られている。

#### 土坑SK13

後期調査地区の西側、南東側サブトレンチの拡張区から検出された。(5・6, 3)区である。溝SD04を切り込んで検出された。断面観察用のベルトにかかり全体を検出していないが、径98cmの梢円形の七坑である。深さは17cmを計る。

### 4. 溝

#### 溝SD02

前期調査地区の東端部サブトレンチから検出された溝状の落ち込みと、後期調査地区の南東側サブトレンチから検出された溝状の落ち込みとが一連の遺構と考えて、一応、溝とした。幅8.42m以上、深さ80cmを計る。底面近くより、礫や陶磁器類が出土している。

#### 溝SD03

後期調査地区の南東側サブトレンチから検出された。このサブトレンチの西側で検出され、さらに西側の拡張区へ拡がっている。幅は2.22m以上、深さ46cmを計る。溝SD04はこの溝を切っている。

#### 溝SD04

後期調査地区の南東側サブトレンチの拡張区から検出された。拡張区の西端部から検出された南北に走る溝で、さらに西側へ拡がっている。幅5.00m以上、深さ56cmを計る。

## IV 遺物、土器陶磁器類

### 1. 土師器〔1〕

ここで取り上げる土師器は、ロクロを使用している土師器で、一般に平安時代後期を中心とする年代を与えられているものである。図面1-101~146の46点である。形態的には椀類と皿類である。

#### 椀類

図面1-101~125の25点である。

椀 101.102の2点で、全体の形態が判るものの、口径は14.8cmと10.8cmである。

椀口縁部 103.104の2点である。口径は12.9cmと13.0cmである。

椀底部 高台付椀の底部で105である。

椀類底部 梗乃至皿の底部で106~125の20点である。底部は糸切りのままである。底面の厚みは比較的厚いものである。底径は3.6~6.0cmである。

#### 皿類

図面1-126~146の21点である。

皿 126~135の10点である。全体の形態が判明しないものもあるが、ほぼ同一のものとした。口径はやや大型の126.127が12.0cm、小型の128~135が8.4~9.7cmである。

皿底部A類 136~141の6点である。やや厚い底部を擁し、口縁部が欠損しているが皿と判断した。底部は糸切りのままである。底径は5.0~6.8cmである。

皿底部B類 142~146の5点である。柱状高台をもつ皿である。口縁部は欠損している。底部は糸切りのままである。底径は3.2~4.0cmである。146はやや低い高台で、皿底部A類に近い。底径は5.6cmである。

### 2. 土師器〔2〕

ここで取り上げる土師器は、ロクロを使用していない土師器、いわゆる手づくねの製品である。図面2-201~240の40点である。すべて皿の形態であるが、所属する時期より大きく2区分される。

#### 皿A類

図面2-201~207の7点である。一般に平安時代末頃~鎌倉時代初頃に比定されているものである。これらは以下のように細分される。

a. 201.202。口縁部に2段の横ナデを施す皿である。

b. 203.204。口縁部に2段の横ナデの内、上方のものが弱いもの。

c. 205.206。口縁部に1段の横ナデを施し、口端部は面取り気味に直立するもの。

d. 207。口縁部に2段の横ナデの内、上方のものが強くなされ、口端部が強く外反するもの。

#### 皿B類

図面2-208~240の33点である。一般に戦国時代に比定されているものである。汎量的には小型品から大型品まで差異があるが、形態や手法が同一であり、一群のものと把握している。形態は、平底の底部より、

口縁・体部が外上方へ開く。調整手法は、体・底部をナデや指圧によって整え、口縁部を横ナデして外反させている。口端部内面は横ナデを施すことによって、つまみ上げたような形態になる。口径は7.6~17.0cmとなり、大きさより以下のように4区分される。

- a. 超大型品。208の1点で口径17.0cmを計るもの。
- b. 大型品。209~226の18点で口径14.0~12.4cmを計るもの。
- c. 中型品。227~230の4点で口径11.0~10.6cmを計るもの。
- d. 小型品。231~240の10点で口径9.0~7.6cmを計るもの。

### 3. 須恵器

奈良時代頃の須恵器で、図面3-301~315の15点である。

杯底部A類 301.302の2点。受け部の付く杯身である。底部は丸味を持ち、ヘラ削りされている。

杯口縁部 303の1点。やや小型の杯の口縁部である。

杯底部B類 304~307の4点。高台付の底部である。307は大型品である。

蓋 308~313の6点。杯蓋である。308は口端部内面にかえりが付くもので、大型品である。309~312は大井部が欠損しているが、つまみが付く形態と判断している。313もつまみが付くものと見受けられる。

瓶 314.315の2点。瓶類の底部である。

### 4. 古代・中世陶磁器

古代・中世の陶磁器で、図面3-401~406の6点である。

珠洲 珠洲の擂鉢の底部で401ある。オロシ日は確認できない。

瀬戸 濱戸の椀で402である。灰釉が掛かっている。

白磁 輸入白磁の椀である。403~406の4点で、口端部は玉縁である。

### 5. 近世陶磁器

越中瀬戸 越中瀬戸で、図面4-501~519の19点である。

唐津 肥前陶器でいわゆる唐津である。図面5-520~542、図面6-543~560の41点である。

伊万里 肥前磁器でいわゆる伊万里である。図版25-2:568~570の3点で、染付である。

瀬戸美濃 瀬戸美濃系の磁器である。図版25-2:571の1点で、染付である。

## V 遺物、その他の遺物

### 1. 瓦

#### 古代瓦

越中国府関連遺跡出土の古代の瓦には、2種類ある。一つは白鳳時代の寺院跡の可能性が指摘されている御亭角遺跡(御亭角鹿寺)、越中國府推定地である勝興寺の南側地区を中心に出土する瓦である。図面7-601はこのタイプの半瓦で、格子目の叩きが付いている。もう一方は、越中国分寺所要瓦とされている一群である。いわゆる国分寺瓦である。奈良時代後半を中心とする時期のものである。この瓦の主要な出土地は、國府址推定地付近や、越中國分寺跡をはじめ、越中國府関連遺跡の伏木台地に、10箇所あまりある。図面7-602はこのタイプの平瓦である。

#### 煙瓦

近世の瓦としては、煙瓦と赤瓦がある。図面7-603は煙瓦で平瓦である。

#### 赤瓦

酸化鉄の溶液を塗布して焼成された瓦、赤瓦である。図面7-604~606として、この赤瓦の軒丸瓦、丸瓦、棟瓦を示した。604は巴文軒丸瓦の破片である。606は棟瓦でも、比較的背が低く、伏間瓦とされているものである。

### 2. 土製品

#### 土錘

土製品としては、土錘が出土している。図面8-607~616として土錘を10点示した。管状の形態で上部質である。

### 3. 石製品

#### 砥石

石製品としては、砥石が出土している。図面8-617~620として砥石を4点示した。

## VI 結 語

### 遺跡

伏木台地の遺跡については、「越中國府関連遺跡」と総称しているが、今回の調査で検出された遺跡は、国府関連のものは少なく、もっと時代が下り、古国府城や勝興寺に関するものが主体となっている。出土遺物については、1. 奈良～平安時代、2. 戦国時代、3. 江戸時代のものに大別できるが、それぞれ、国府、古国府城、勝興寺に対応するものと言える。なお、江戸時代としたものの中には、厳密には16世紀末の桃山時代のものも含んでいる。

### 遺構

検出遺構の個々の時期については、以下のように判断している。

1. 奈良～平安時代：掘立柱建物址 S B01。
2. 戦国時代：土坑 S K11。
3. 江戸時代：道路址 S F01、土坑 S K10・12・13、溝 S D02・03・04。

これらの各遺構は、上述のとおり、それぞれ、1. 国府、2. 古国府城、3. 勝興寺に関するものと推定している。

### 路面

発掘区の大部分は勝興寺の参道である石敷路面（道路址 S F01）が占めている。この遺構は、他の遺構を覆う形で検出されており、一番新しい遺構群である「江戸時代の勝興寺に関する遺構群」の中でも、最も新しい遺構と言える。路面の直上からは、染付け磁器片が数点出土している。伊万里系及び瀬戸窯系で18～19世紀のものである。この路面より古い遺構で、この路面の時期を決める手掛かりとなる遺構が幾つかある。土坑 S K10からは、赤瓦の破片が出土している。また、溝 S D02・04からは、越中瀬戸、唐津を中心とした遺物が出土している。越中瀬戸、唐津については、17世紀代のものとの教示を得ており、石敷路面の時期を考慮する上で参考になる。

路面の幅は現在の勝興寺の總門と一致し、路面の方向は、これと直行する形で東側へ延びて行っている。このことからも、勝興寺に関するものであることは明白である。

### 路面以前

勝興寺の参道である石敷路面は、基盤層の上に単純に形成されたものではない。基盤となる微地形は小谷等が入る凹凸がある複雑なものであり、また16世紀末～17世紀代の溝等が存在しており、当初より、このような幅約9mの参道が形成されていたとは考えられない。いろいろな経過を経て、江戸時代後期に今回検出したような参道になったと理解したい。

### 土師器

土坑 S K11からは、土師器皿がまとめて出土している。この皿は特徴的なもので、勝興寺周辺の各調査地区からは多く出土しており、戦国時代の16世紀代のものと理解してきた。またこの性格付けてして、勝興寺が当伏木台地で再興される以前に存在した「古国府城」に関するものと推定してきたところである。より厳密には1585年以前のものと考えたい。

### 陶磁器

陶磁器では、陶器、特に越中瀬戸と唐津の出土が多い。近世初期における越中の食器類の一様相を示して

いると言える。すなわち、在地の越中瀬戸と外來の唐津がほとんど占めていた時期である。ただし、勝興寺の性格を考慮するなら、一般的の村落とはやや様相を異にしていたかもしれない。

#### 参考文献

- 久保 尚文 1983 「勝興寺と越中一向一揆」 枝書房  
坪井 利弘 1986 「因幡瓦屋根 (改訂版)」 理工学社  
岫 順史編 1988 「雲龍山勝興寺古文書集 (改訂版)」 枝書房  
久保 智康 1989 「近世中～後期越前における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』第7号 福井考古学会  
大橋 康二 1989 「肥前陶磁」 ニュー・サイエンス社  
古岡英明他 1991 「たかおか－歴史との出会い」 高岡市  
久保 智康 1992 「近世後期南加賀における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』第10号 福井考古学会  
川上 貢他 1994 「越中勝興寺伽藍」 高岡市教育委員会  
高澤重雄他 1994 「富山県の地名」 半凡社  
宮田 進一 1995 「各地の土器様相－北陸」『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社

別表 土器陶磁器類一覧表

No	種類	器形	図面	出士位置	備考
101	土師器	碗	1	南東側サブトレンチ、底面近く	
102	土師器	碗	1	南東側サブトレンチ拡張区、SD04	
103	土師器	碗	1	西端部北側サブトレンチ	
104	土師器	碗	1	西端部北側サブトレンチ	
105	土師器	碗	1	南東側サブトレンチ、SD02	
106	土師器	碗皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
107	土師器	碗皿	1	表土	
108	土師器	碗皿	1	西端部南側サブトレンチ	
109	土師器	碗皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
110	土師器	碗皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
111	土師器	碗皿	1	西端部北側サブトレンチ	
112	土師器	碗皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
113	土師器	碗皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
114	土師器	碗皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
115	土師器	碗皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
116	土師器	碗皿	1	表土	
117	土師器	碗皿	1	西端部北側サブトレンチ	
118	土師器	碗皿	1	表土	
119	土師器	碗皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
120	土師器	碗皿	1	表土	
121	土師器	碗皿	1	表土	
122	土師器	碗皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
123	土師器	碗皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
124	土師器	碗皿	1	西端部北側サブトレンチ	
125	土師器	皿	1	表土	
126	土師器	皿	1	表土	
127	土師器	皿	1	西端部北側サブトレンチ	
128	土師器	皿	1	西端部北側サブトレンチ	
129	土師器	皿	1	西端部北側サブトレンチ	
130	土師器	皿	1	西端部北側サブトレンチ	
131	土師器	皿	1	表土	
132	土師器	皿	1	南東側サブトレンチ、SD02	
133	土師器	皿	1	西端部北側サブトレンチ	
134	土師器	皿	1	西端部北側サブトレンチ	

No	種類	器形	面	出 土 位 置	備 考
1 3 5	土 師 器	皿	1	西端部北側サブトレンチ	
1 3 6	土 師 器	皿	1	南東側サブトレンチ, SD02	
1 3 7	土 師 器	皿	1	南東側サブトレンチ, SD02	
1 3 8	土 師 器	皿	1	西端部北側サブトレンチ	
1 3 9	土 師 器	皿	1	西端部南側サブトレンチ	
1 4 0	土 師 器	皿	1	西端部北側サブトレンチ	
1 4 1	土 師 器	皿	1	南東側サブトレンチ, SD02	
1 4 2	土 師 器	皿	1	西端部南側サブトレンチ	
1 4 3	土 師 器	皿	1	南東側サブトレンチ, SD02	
1 4 4	土 師 器	皿	1	南東側サブトレンチ, SD02	
1 4 5	土 師 器	皿	1	南東側サブトレンチ, SD02	
1 4 6	土 師 器	皿	1	南東側サブトレンチ, SD02	
2 0 1	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD02	
2 0 2	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD02	
2 0 3	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD02	
2 0 4	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD02	
2 0 5	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD02	
2 0 6	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD02	
2 0 7	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ拡張区, SD04	
2 0 8	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD02	
2 0 9	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD02	
2 1 0	土 師 器	皿	2	西端部南側サブトレンチ	
2 1 1	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	
2 1 2	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	
2 1 3	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	
2 1 4	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	
2 1 5	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	
2 1 6	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ	
2 1 7	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	
2 1 8	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK02	
2 1 9	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	
2 2 0	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	
2 2 1	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	
2 2 2	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK02	
2 2 3	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	
2 2 4	土 師 器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK11	

Na	種類	器形	図面	出 土 位 置	備 考
225	土師器	皿	2	南東側サブトレンチ	
226	土師器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD 02	
227	土師器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK 11	
228	土師器	皿	2	東端部サブトレンチ	
229	土師器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK 11	
230	土師器	皿	2	西端部南側サブトレンチ	
231	土師器	皿	2	西端部北側サブトレンチ	
232	土師器	皿	2	西端部北側サブトレンチ	
233	土師器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK 11	
234	土師器	皿	2	西端部南側サブトレンチ	
235	土師器	皿	2	表上	
236	土師器	皿	2	南東側サブトレンチ, SK 11	
237	土師器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD 02	
238	土師器	皿	2	南東側サブトレンチ, SD 02	
239	土師器	皿	2	西端部南側サブトレンチ	
240	土師器	皿	2	西端部南側サブトレンチ	
301	須恵器	杯	3	西端部北側サブトレンチ	
302	須恵器	杯	3	西端部南側サブトレンチ	
303	須恵器	杯	3	南東側サブトレンチ, SD 02	
304	須恵器	杯	3	南東側サブトレンチ	
305	須恵器	杯	3	南東側サブトレンチ	
306	須恵器	杯	3	南東側サブトレンチ, SD 02	
307	須恵器	杯	3	西端部南側サブトレンチ	
308	須恵器	蓋	3	表土	
309	須恵器	蓋	3	南東側サブトレンチ, SD 02	
310	須恵器	蓋	3	南東側サブトレンチ	
311	須恵器	蓋	3	南東側サブトレンチ, SD 02	
312	須恵器	蓋	3	擾乱	
313	須恵器	蓋	3	擾乱	
314	須恵器	瓶	3	表土	
315	須恵器	瓶	3	南東側サブトレンチ, SD 02	
401	珠洲	擂鉢	3	南東側サブトレンチ, SD 02	
402	漱戸	椀	3	表土	
403	輸入白磁	椀	3	表土	
404	輸入白磁	椀	3	西端部北側サブトレンチ	

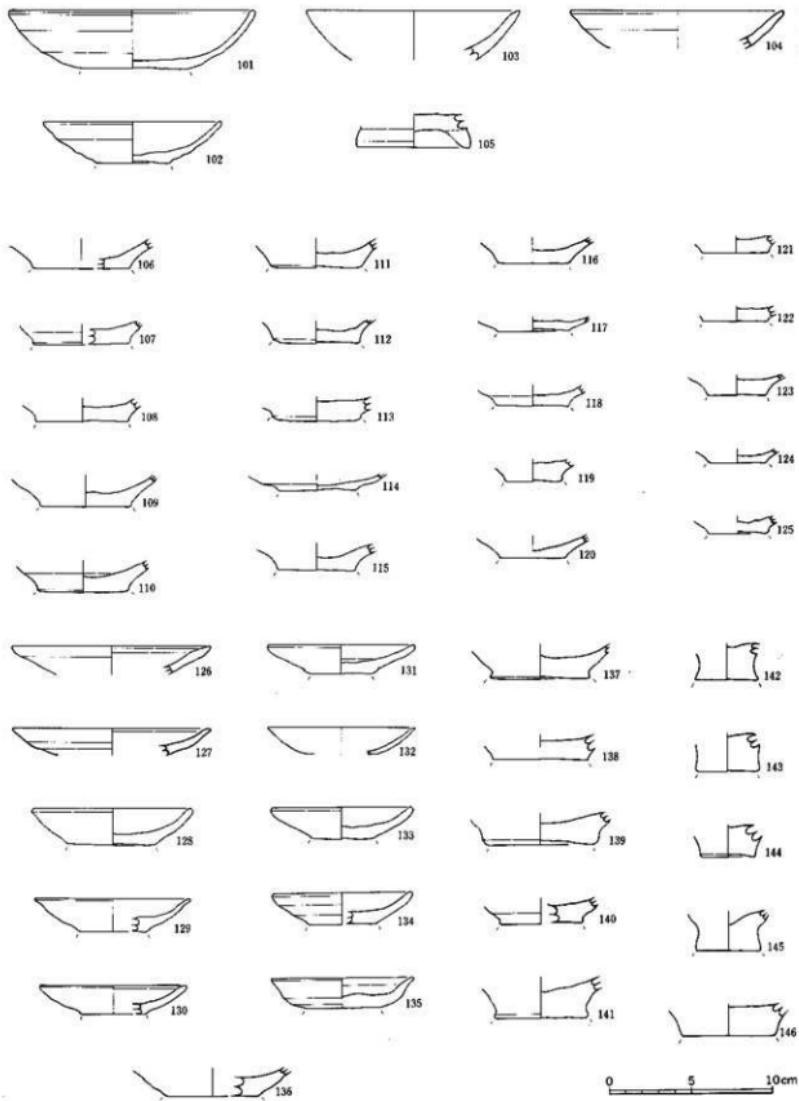
No.	種類	器形	図面	出 土 位 置	備 考
4 0 5	輸入白磁	椀	3	南東側サブトレンチ, SD 02	
4 0 6	輸入白磁	椀	3	南東側サブトレンチ, SD 02	
5 0 1	越中瀬戸	椀	4	南東側サブトレンチ, SD 02	
5 0 2	越中瀬戸	椀	4	南東側サブトレンチ, SD 02	
5 0 3	越中瀬戸	椀	4	南東側サブトレンチ	
5 0 4	越中瀬戸	椀	4	表土	
5 0 5	越中瀬戸	椀	4	南東側サブトレンチ, SD 02	
5 0 6	越中瀬戸	皿	4	西端部サブトレンチ	
5 0 7	越中瀬戸	皿	4	南東側サブトレンチ	
5 0 8	越中瀬戸	皿	4	表土	
5 0 9	越中瀬戸	皿	4	南東側サブトレンチ	
5 1 0	越中瀬戸	皿	4	南東側サブトレンチ拡張区, SD 04	
5 1 1	越中瀬戸	皿	4	南東側サブトレンチ	
5 1 2	越中瀬戸	鉢	4	西端部北側サブトレンチ	
5 1 3	越中瀬戸	鉢	4	西端部南側サブトレンチ	
5 1 4	越中瀬戸	鉢	4	東端部サブトレンチ, SD 02	
5 1 5	越中瀬戸	鉢	4	表土	
5 1 6	越中瀬戸	鉢	4	南東側サブトレンチ	
5 1 7	越中瀬戸	壺	4	東端部サブトレンチ, SD 02	
5 1 8	越中瀬戸	壺	4	南東側サブトレンチ	
5 1 9	越中瀬戸	壺	4	表土	
5 2 0	唐 津	碗	5	南東側サブトレンチ, SD 02	
5 2 1	唐 津	碗	5	南東側サブトレンチ, SD 04	
5 2 2	唐 津	碗	5	東不明	
5 2 3	唐 津	碗	5	南東側サブトレンチ, SD 02	
5 2 4	唐 津	碗	5	南東側サブトレンチ	
5 2 5	唐 津	碗	5	西端部北側サブトレンチ	
5 2 6	唐 津	碗	5	南東側サブトレンチ, SD 02	
5 2 7	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ, SD 04	
5 2 8	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ	
5 2 9	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ拡張区, SD 04	
5 3 0	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ, SD 02	
5 3 1	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ, SD 02	
5 3 2	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ拡張区, SD 04	
5 3 3	唐 津	皿	5	東端部サブトレンチ	
5 3 4	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ拡張区, SD 04	

No	種類	器形	図面	出 土 位 置	備 考
535	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ, SD02	
536	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ	
537	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ, SD02	
538	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ, SD02	
539	唐 津	皿	5	表土	
540	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ拡張区, SD04	
541	唐 津	皿	5	南東側サブトレンチ SD02	
542	唐 津	皿	5	表土	
543	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ, SD02	
544	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ, SD02	
545	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ, SD04	
546	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ, SD02	
547	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ拡張区, SD04	
548	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ, SD02	
549	唐 津	皿	6	西端部南側サブトレンチ	
550	唐 津	皿	6	東端部サブトレンチ, SD02	
551	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ, SD02	
552	唐 津	皿	6	表土	
553	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ, SD02	
554	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ, SD02	
555	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ拡張区, SD04	
556	唐 津	皿	6	南東側サブトレンチ, SD04	
557	唐 津	皿	6	表土	
558	唐 津	甕	6	表土	
559	唐 津	甕	6	表土	
560	唐 津	甕	6	表土	
561	唐 津	皿	なし	南東側サブトレンチ, SD02	図版36. 参照
562	唐 津	皿	なし	東端部サブトレンチ	図版36. 参照
563	唐 津	皿	なし	南東側サブトレンチ拡張区, SK13	図版36. 参照
564	唐 津	皿	なし	南東側サブトレンチ, SD02	図版36. 参照
565	唐 津	皿	なし	南東側サブトレンチ, SD04	図版36. 参照
566	唐 津	皿	なし	南東側サブトレンチ, SD04	図版36. 参照
567	唐 津	皿	なし	南東側サブトレンチ拡張区, SD04	図版36. 参照
568	伊万里	碗	なし	玉石敷き路面直上	図版25-2. 参照
569	伊万里	盃	なし	東端部サブトレンチ, SD02	図版25-2. 参照
570	伊万里	碗	なし	表土	図版25-2. 参照
571	瀬戸美濃	碗	なし	玉石敷き路面直上	図版25-2. 参照

図 面

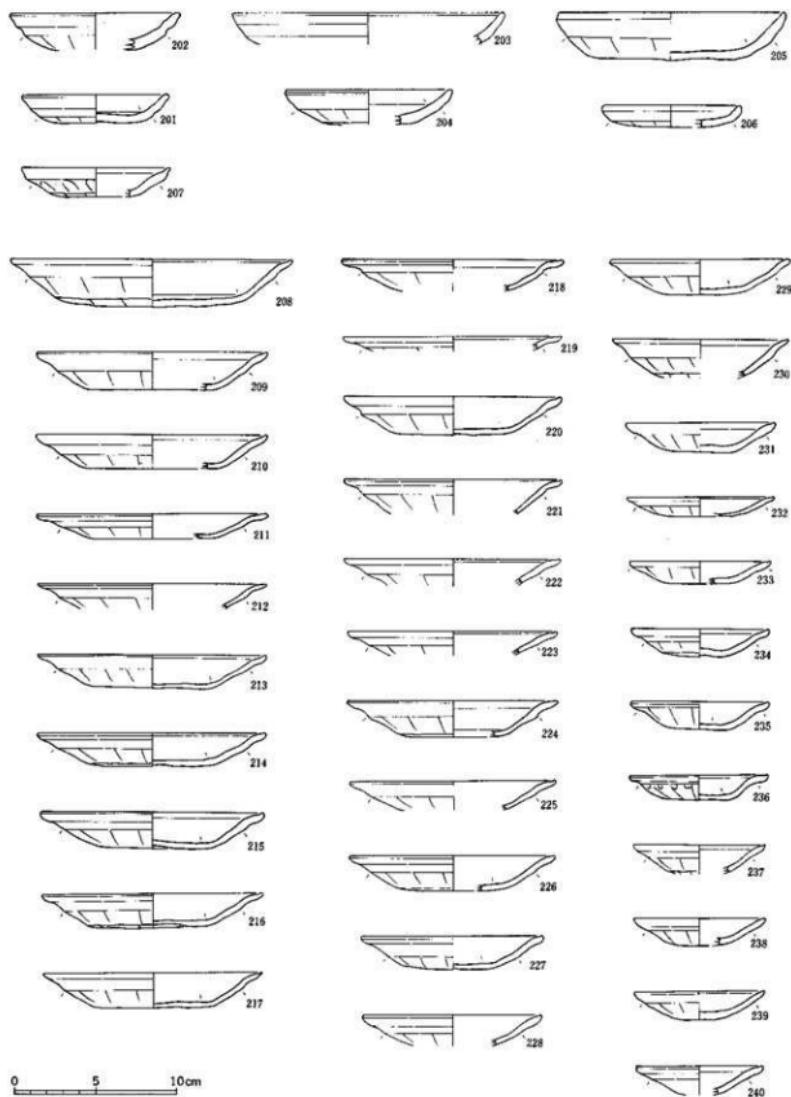
遺物実測図

正面



0 5 10cm

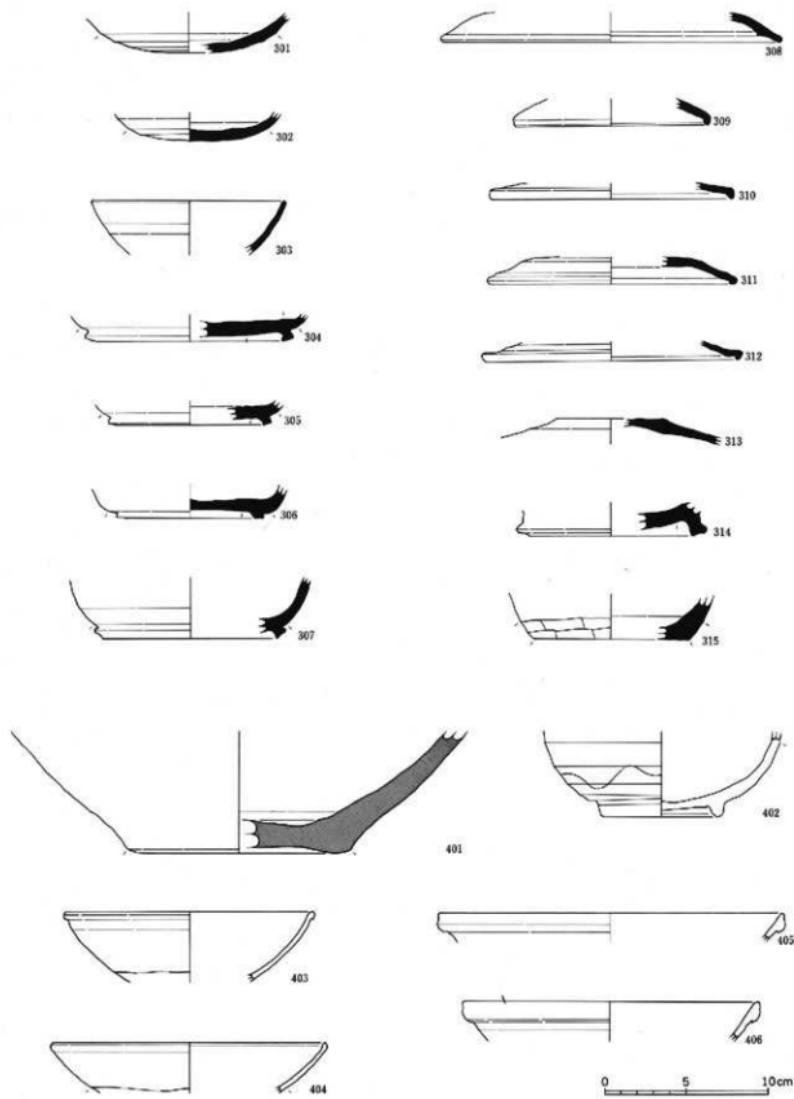
II面  
遺物実測図



0 5 10cm

圖三

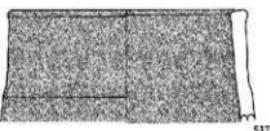
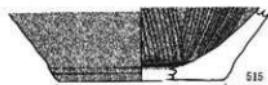
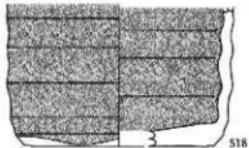
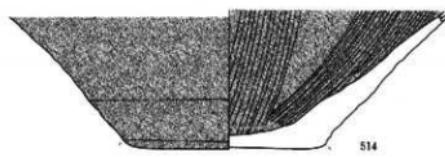
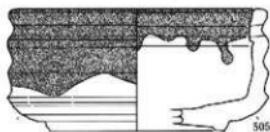
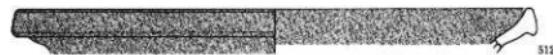
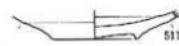
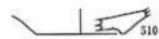
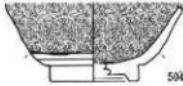
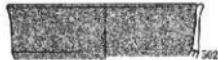
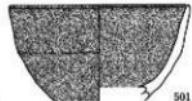
遺物実測図



須恵器、古代・中世陶磁器 須恵器 ; 301~315, 珠洲 ; 401, 潘戸 ; 402, 白磁 ; 403~406

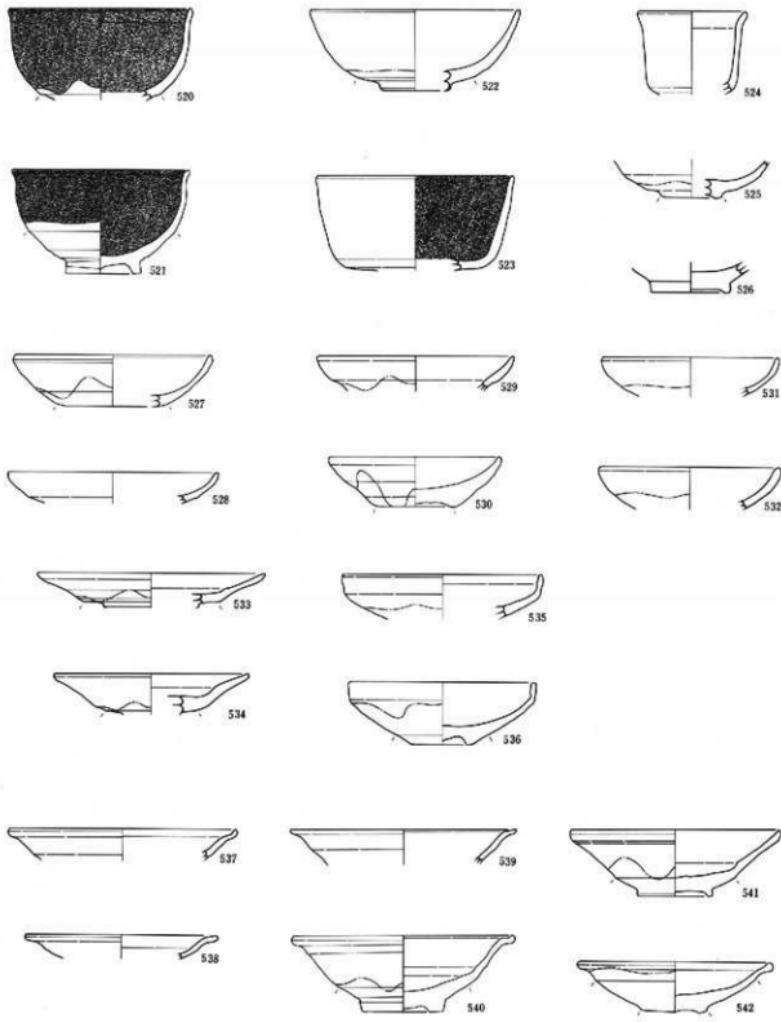
縮尺1/3

四面圖  
遺物実測図



0 5 10cm

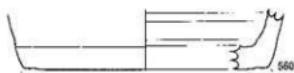
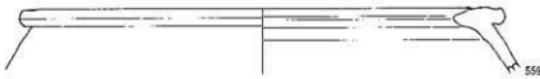
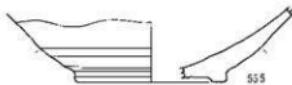
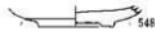
図面五 遺物実測図



0 5 10cm

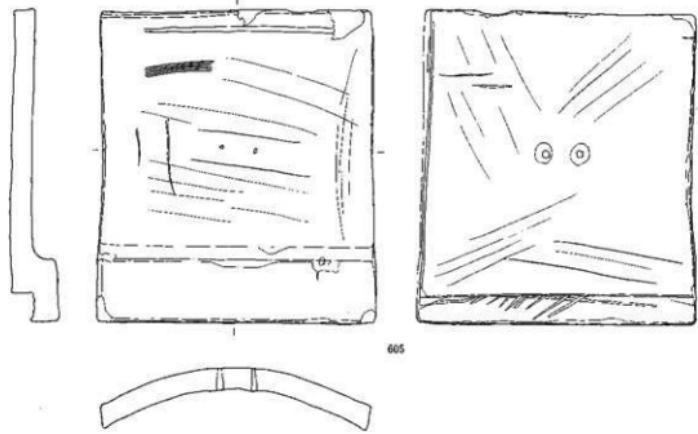
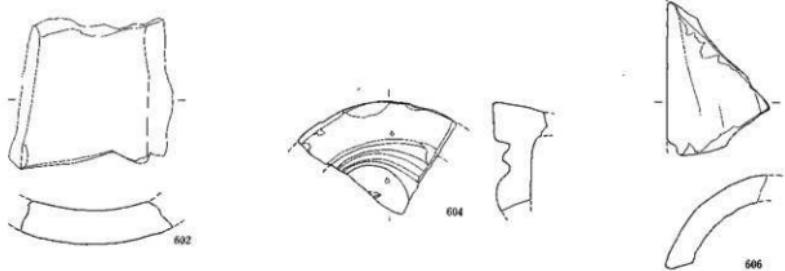
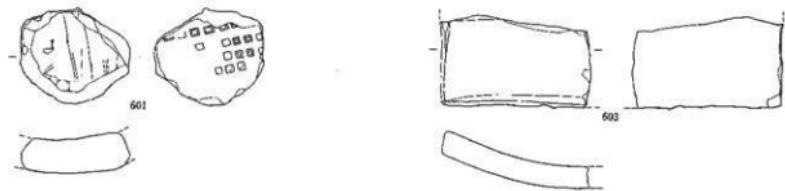
圖六

遺物素描圖



0 5 10cm

図面七 遺物実測図

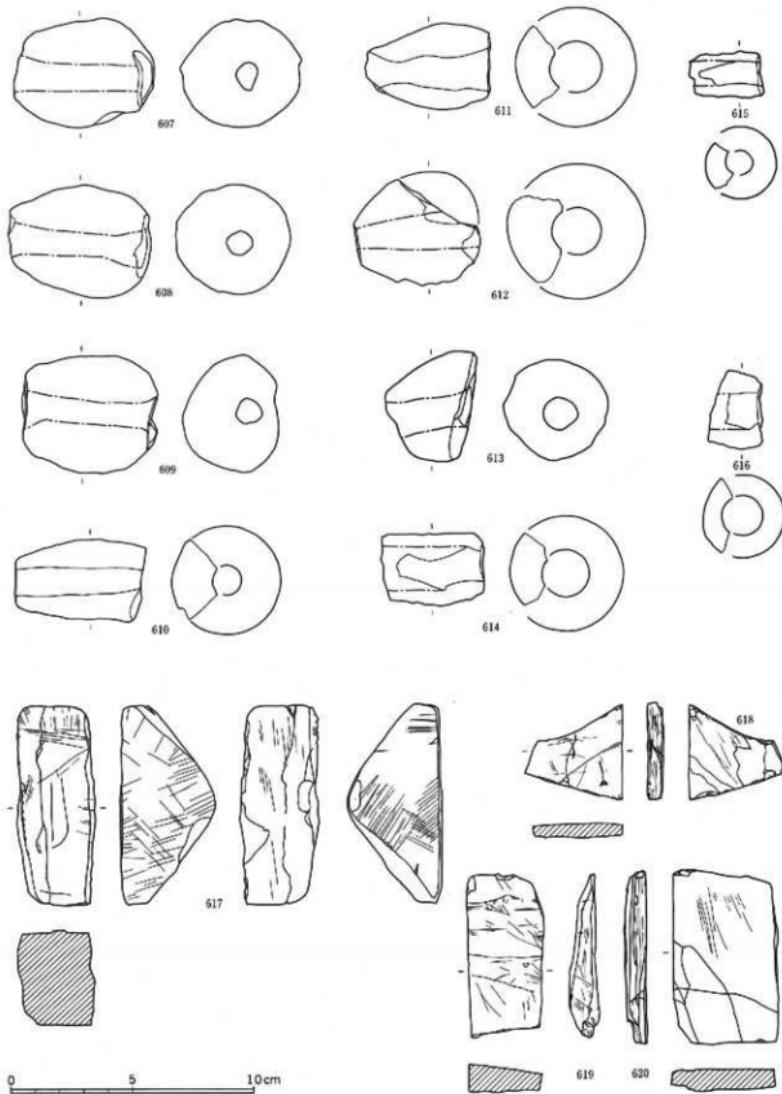


0 5 10cm

瓦 古代瓦；601,602. 煙瓦；603. 小瓦；604~606

縮尺1/4

図面八  
遺物実測図



土製品、石製品 土錘:607~616、砥石:617~620

縮尺1/2

図 版



1. 調査地区遠景（西上方）



2. 調査地区遠景（東上方）



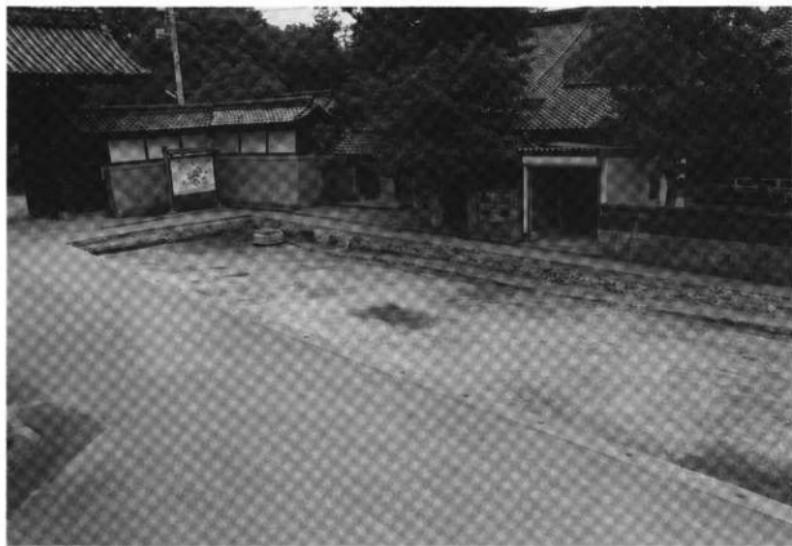
1. 前期調査地区全景（東上方）



2. 前期調査地区全景（東）



1. 前期調査地区全景（西）



2. 前期調査地区近景（南東）



1. 後期調査地区全景（東）



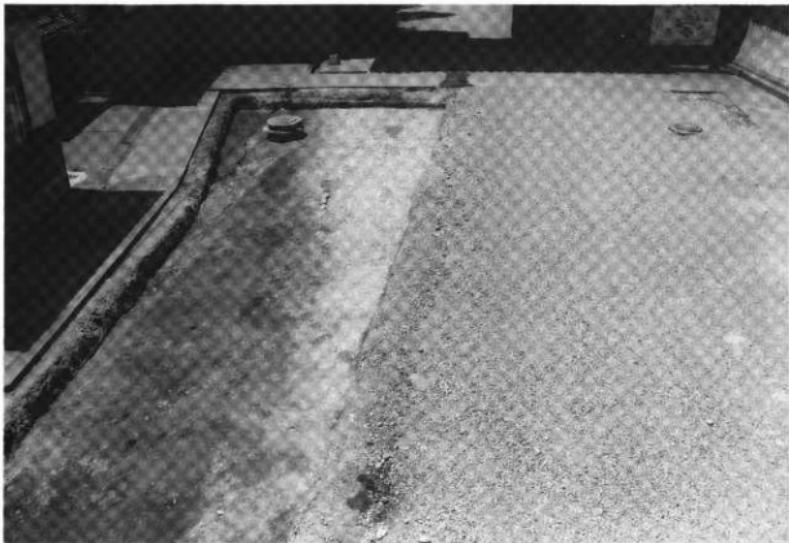
2. 後期調査地区全景（北東）



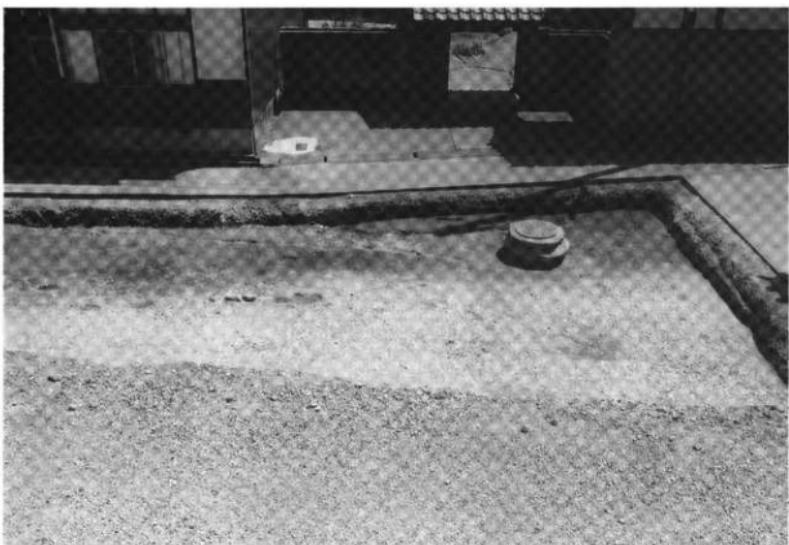
1. 後期調査地区近景（北西）



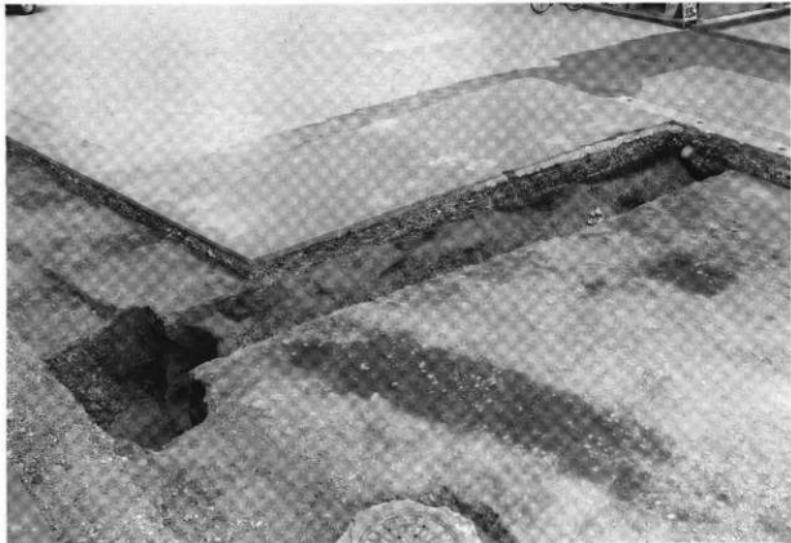
2. 後期調査地区近景（西）



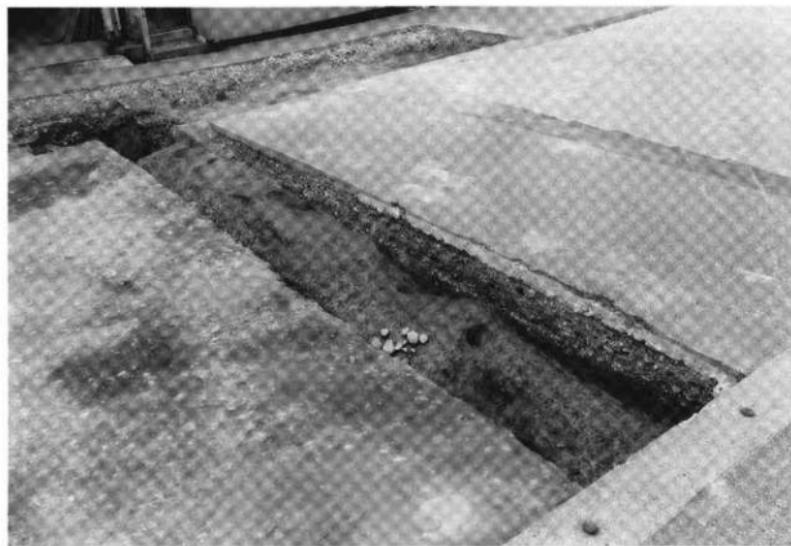
1. 後期調査地区西側近景（東）



2. 後期調査地区西側近景（北）



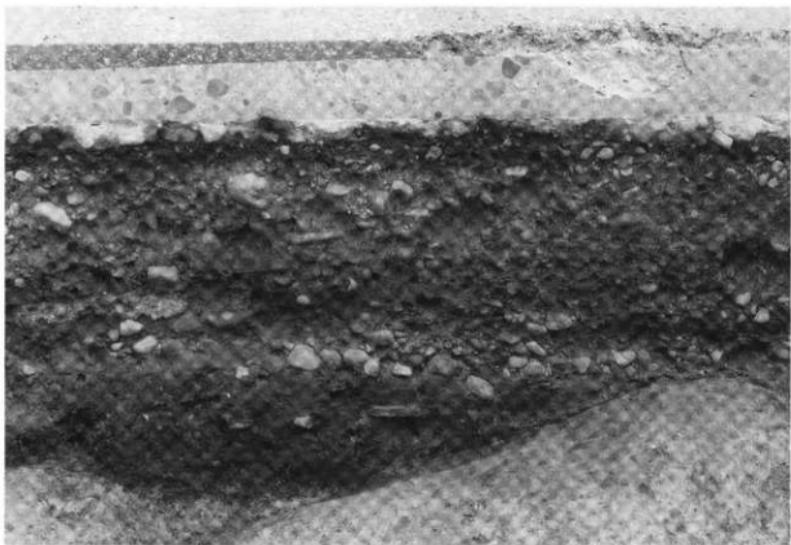
1. 東端部サブトレンチ全景（北西）



2. 東端部サブトレンチ全景（南西）



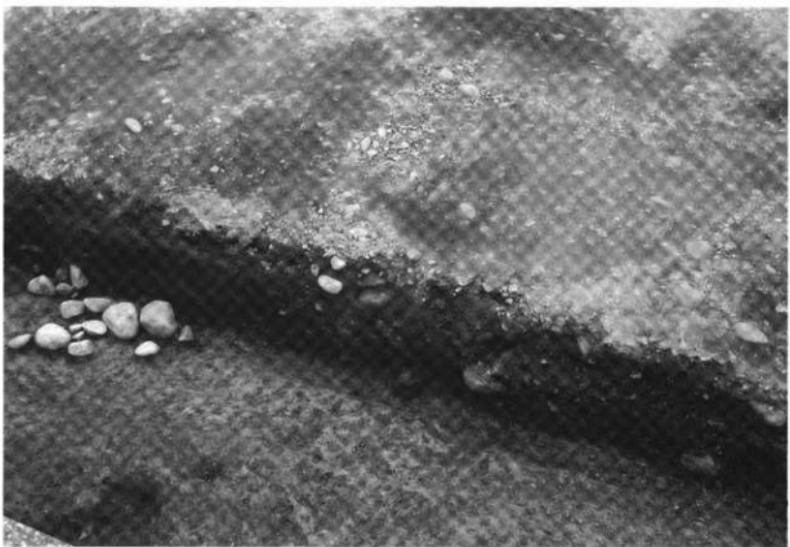
1. 東端部サブトレンチ東壁断面（西）



2. 東端部サブトレンチ東壁断面細部（西）



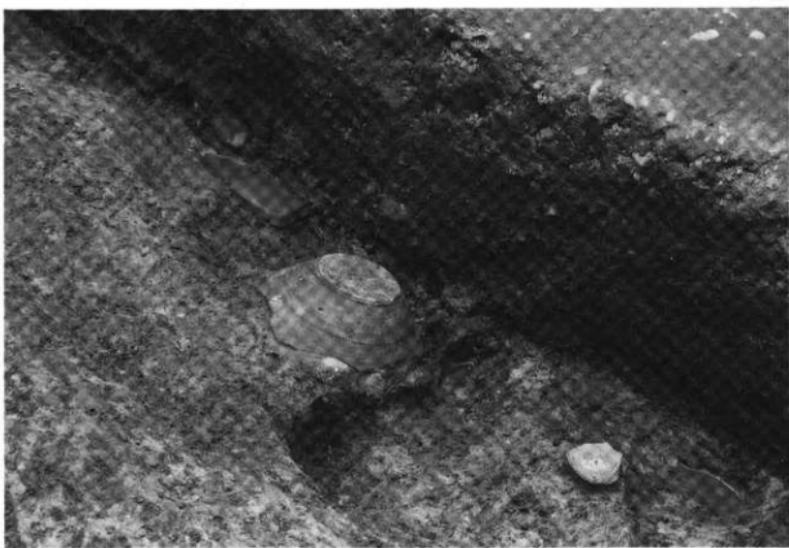
1. 東端部サブトレンチ遺物出土状態南側（北東）



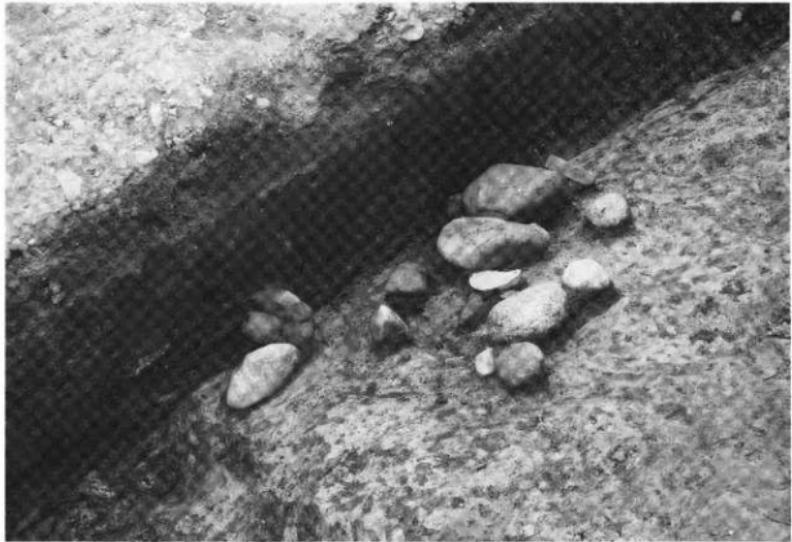
2. 東端部サブトレンチ遺物出土状態中央（北東）



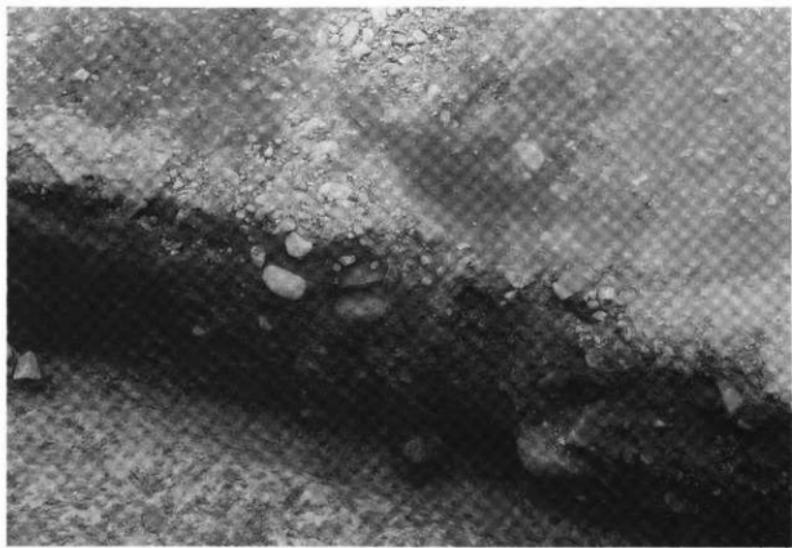
1. 東端部サブレンチ遺物出土状態細部（南東）



2. 東端部サブレンチ遺物出土状態細部（北東）



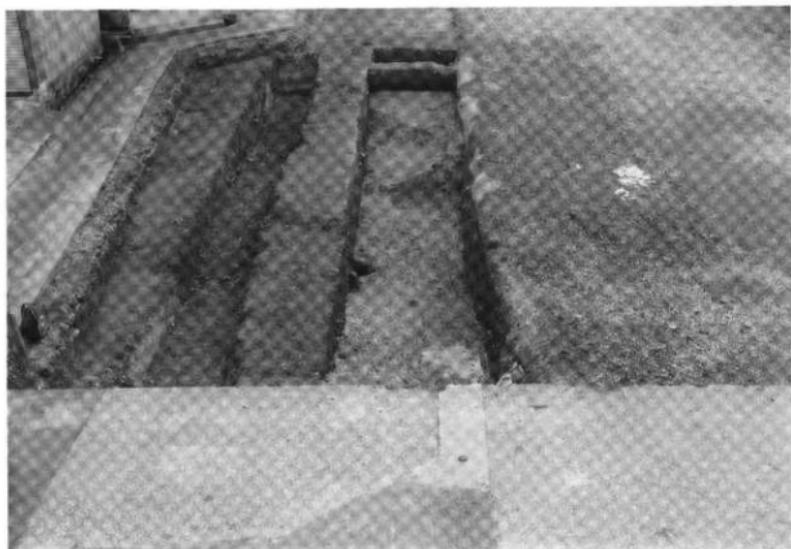
1. 東端部サブトレンチ遺物出土状態細部（南東）



2. 東端部サブトレンチ遺物出土状態細部（北東）



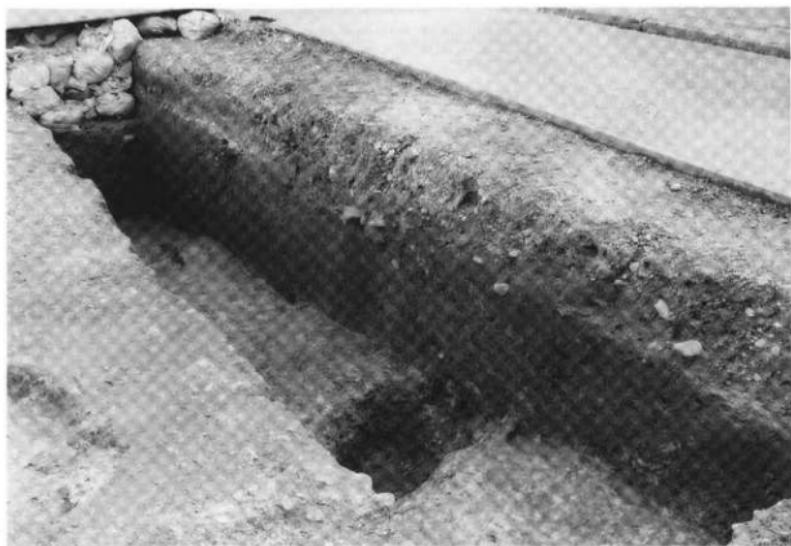
1. 南東側サブレンチ全景（西）



2. 南東側サブレンチ全景（東）



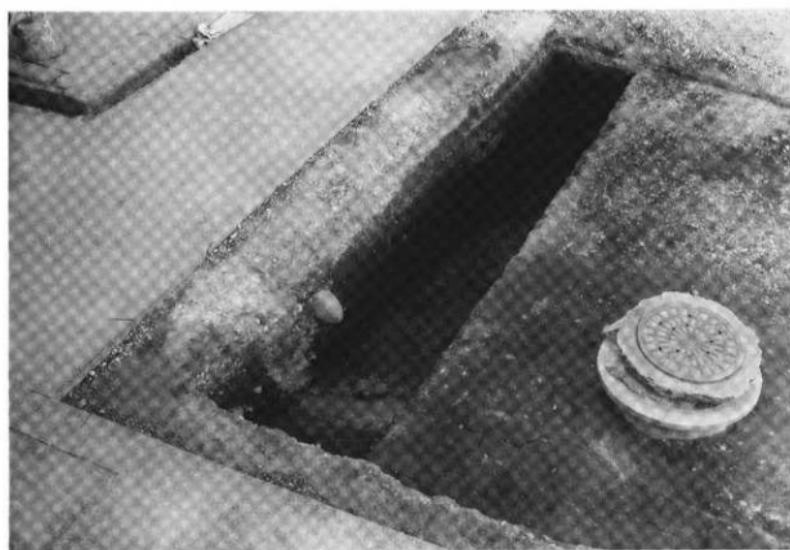
1. 西端部北側サブトレンチ全景（南東）



2. 西端部北側サブトレンチ全景（北東）



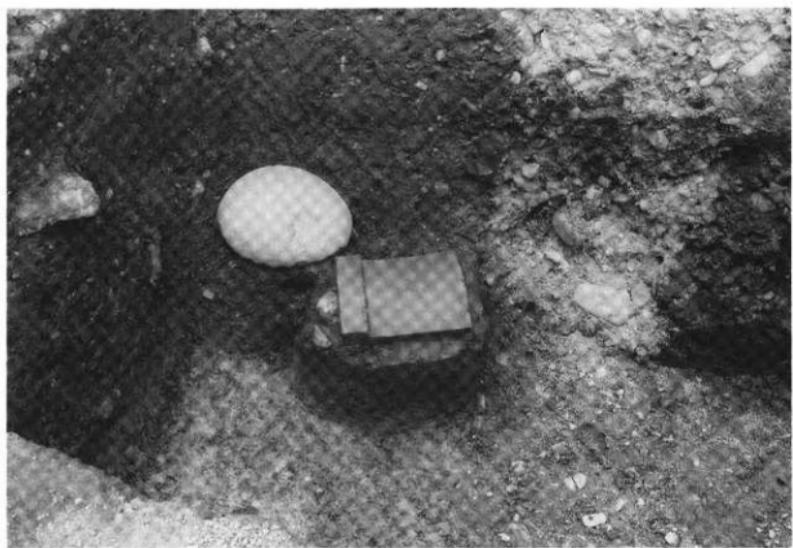
1. 西端部南側サブトレーンチ全景（北東）



2. 西端部南側サブトレーンチ全景（南東）



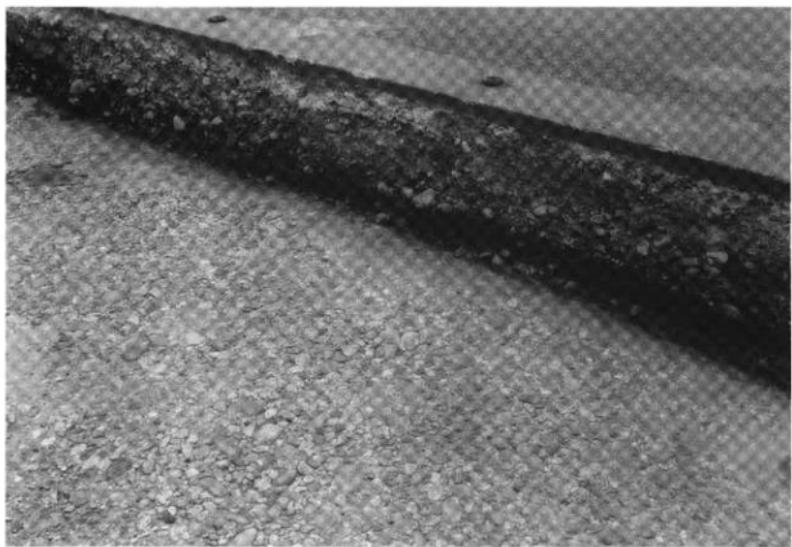
1. 西端部南側サブトレンチ全景（東）



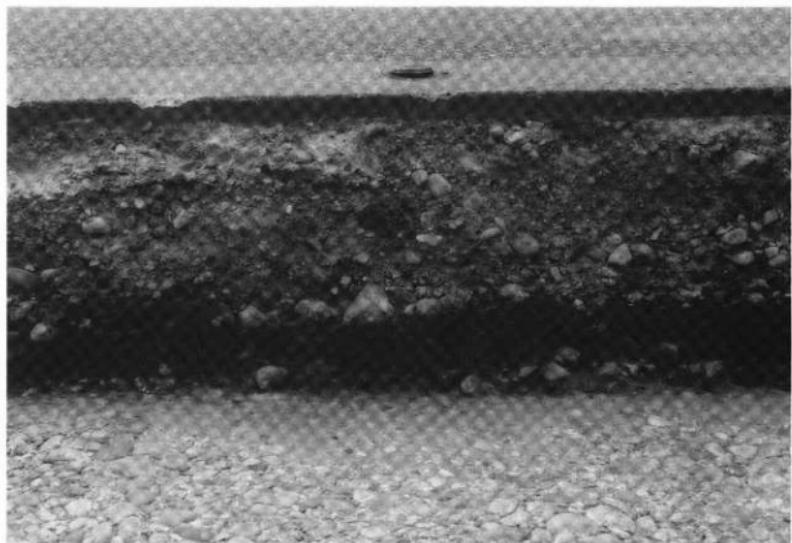
2. 西端部南側サブトレンチ遺物出土状態（東）



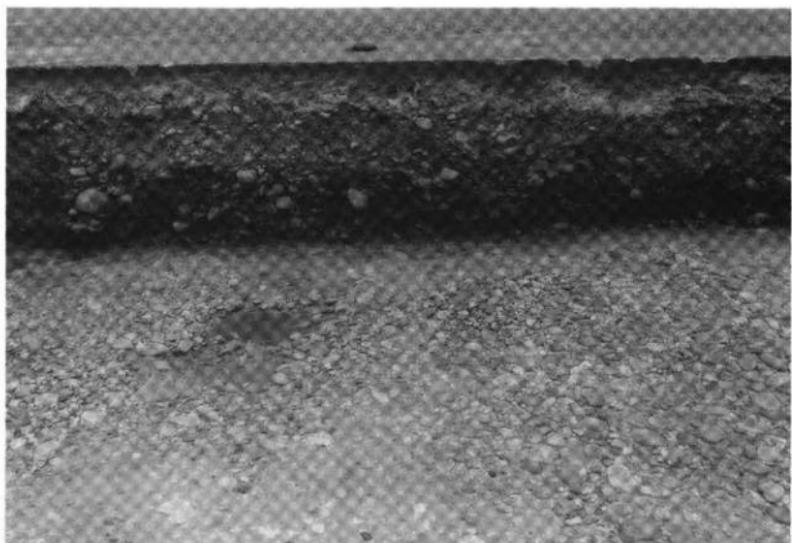
1. 玉石敷きの路面細部状況（北東）



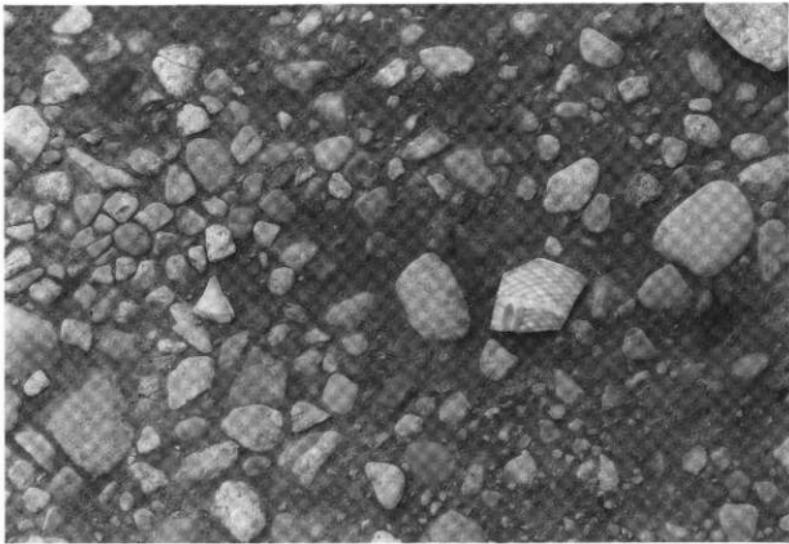
2. 玉石敷きの路面細部状況（北西）



1. 玉石敷きの路面細部状況（北）



2. 玉石敷きの路面細部状況（北）



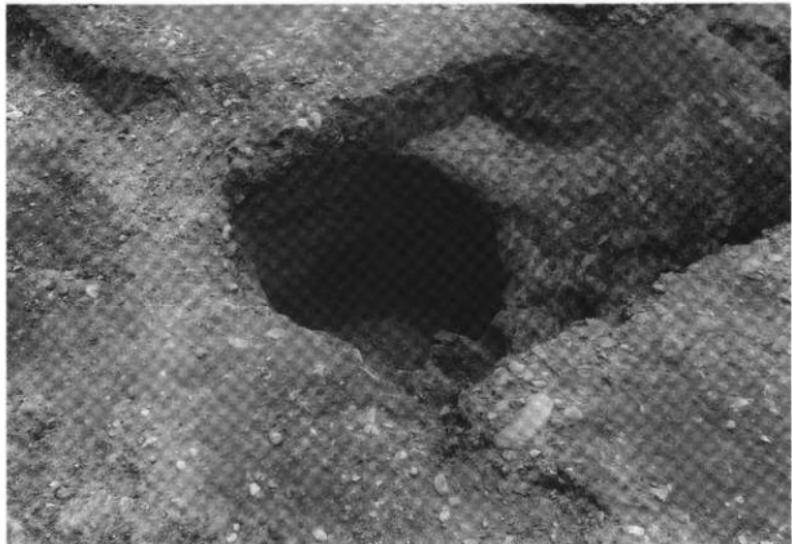
1. 玉石敷きの路面遺物出土状態（北）



2. 玉石敷きの路面遺物出土状態（北）



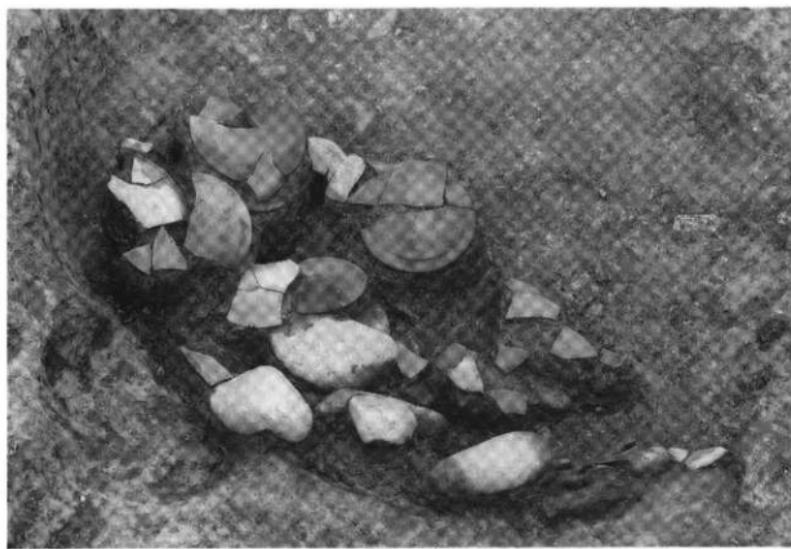
1. 土坑 S K10全景 (北)



2. 土坑 S K10全景 (北西)



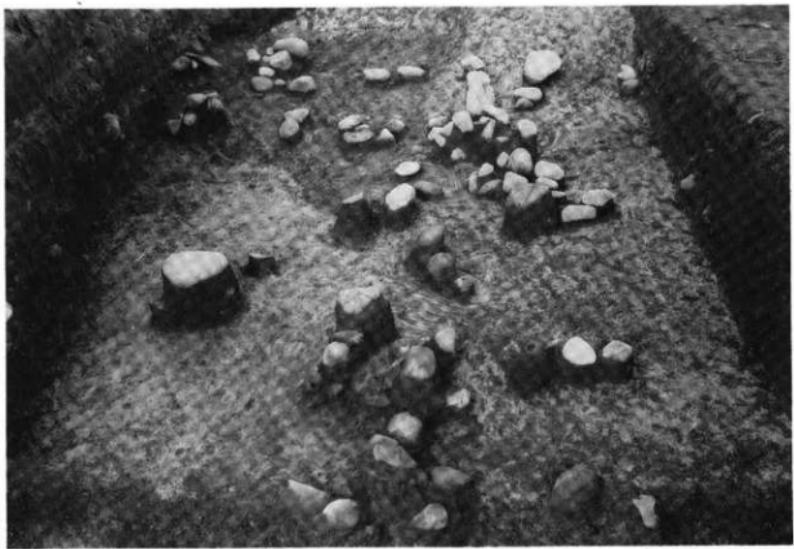
1. 土坑 S K11 遺物出土状態（南）



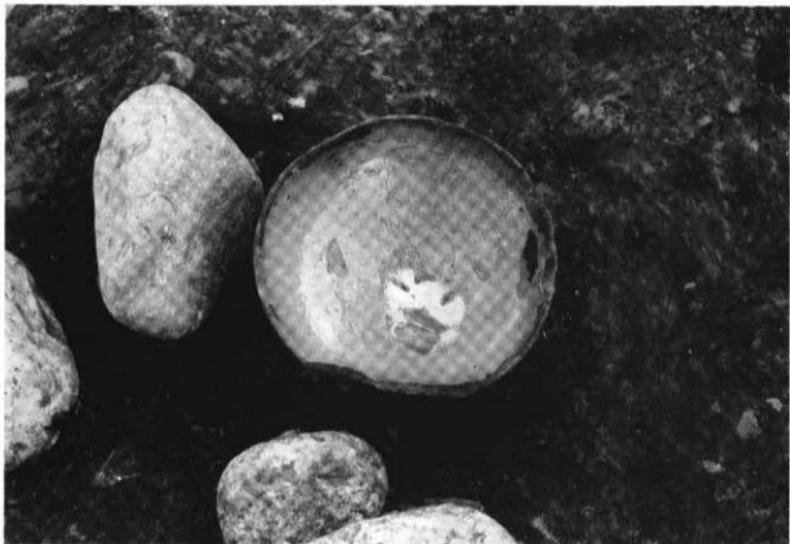
2. 土坑 S K11 遺物出土状態（南）



1. 漢 S D02遺物出土狀態（南西）



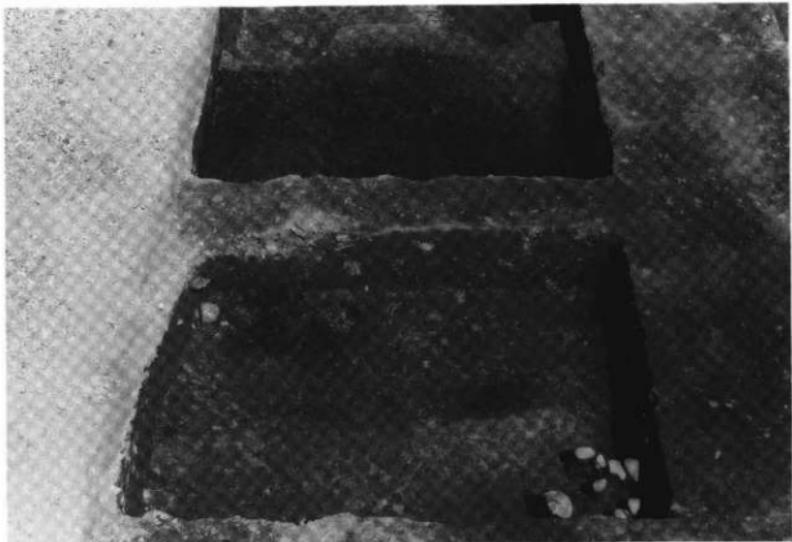
2. 漢 S D02遺物出土狀態（西）



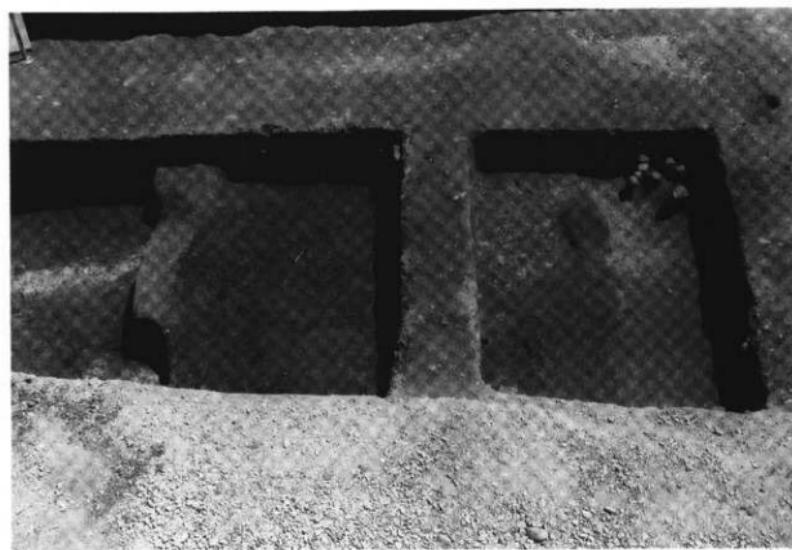
1. 溝 S D02遺物出土状態細部（東）



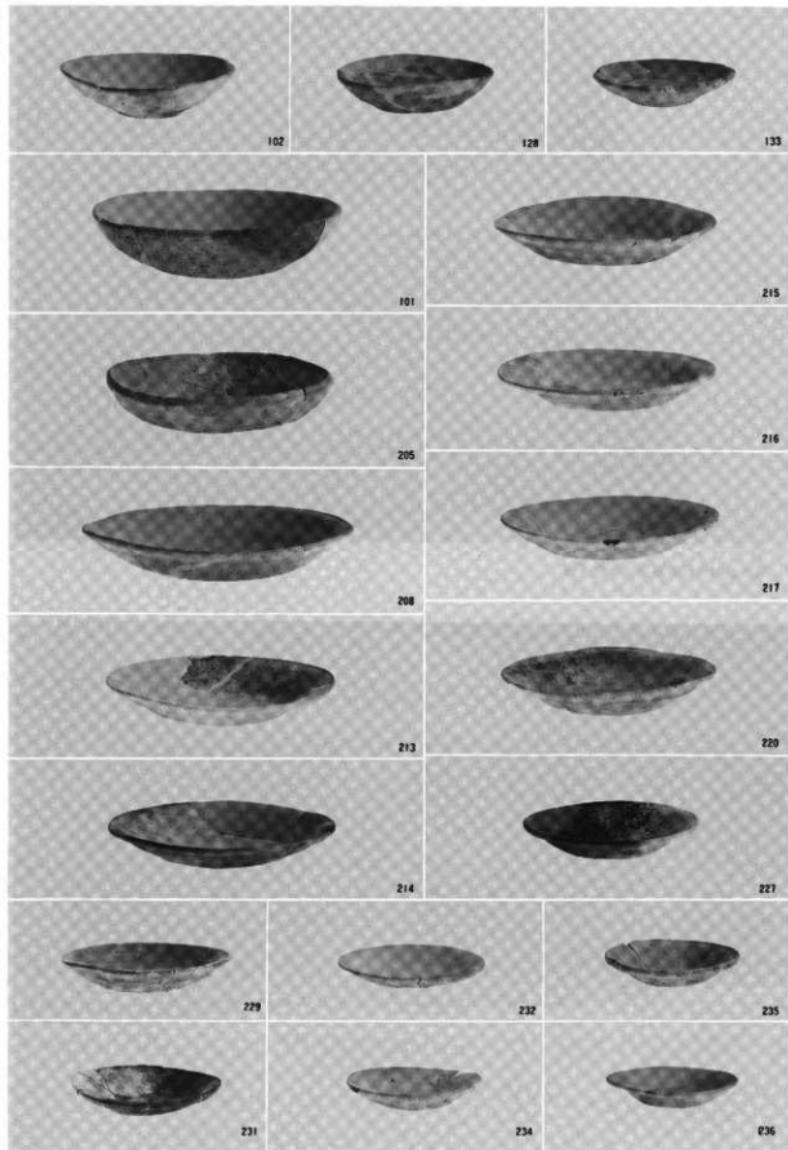
2. 溝 S D02遺物出土状態細部（北）



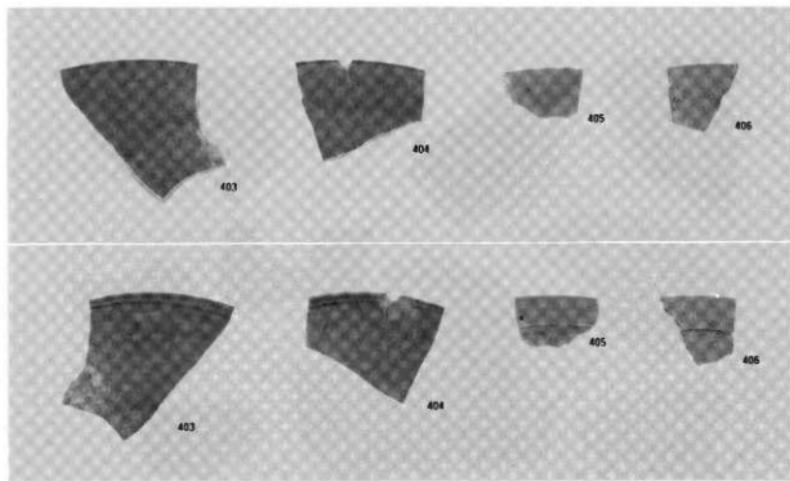
1. 溝 S D04炭化物層出土狀態（西）



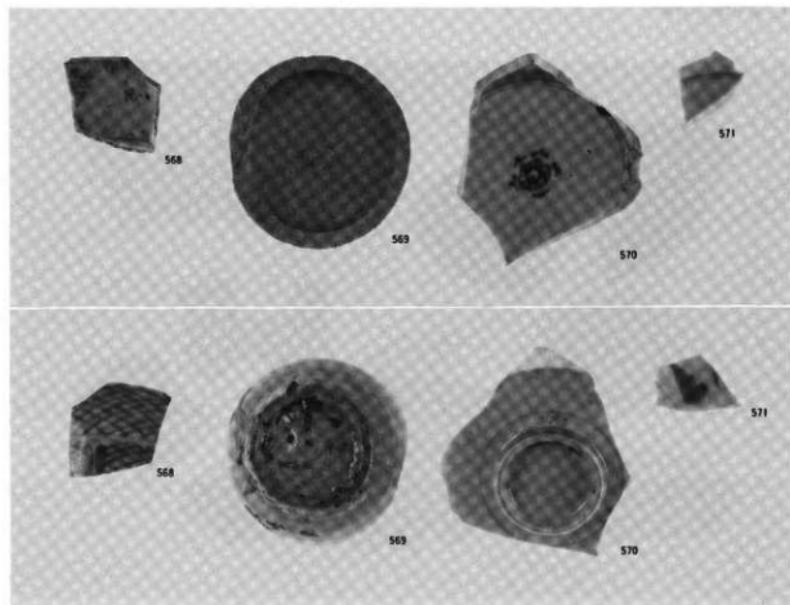
2. 溝 S D04炭化物層出土狀態（北）



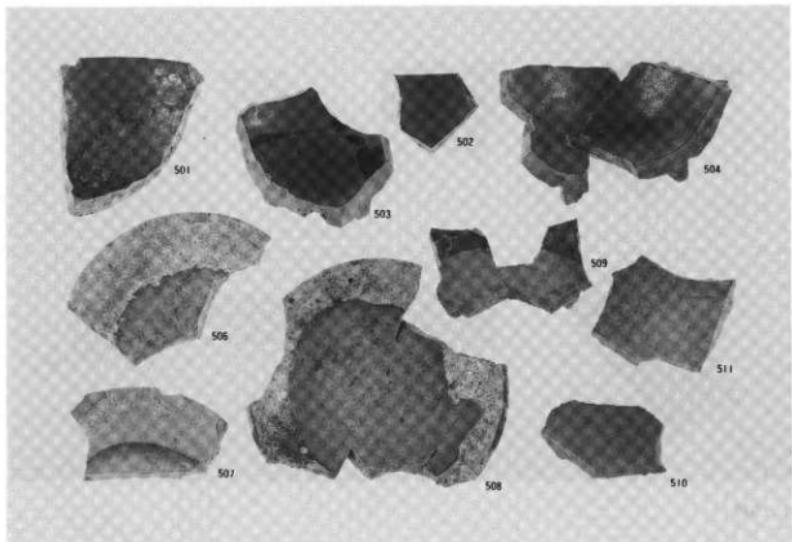
土師器



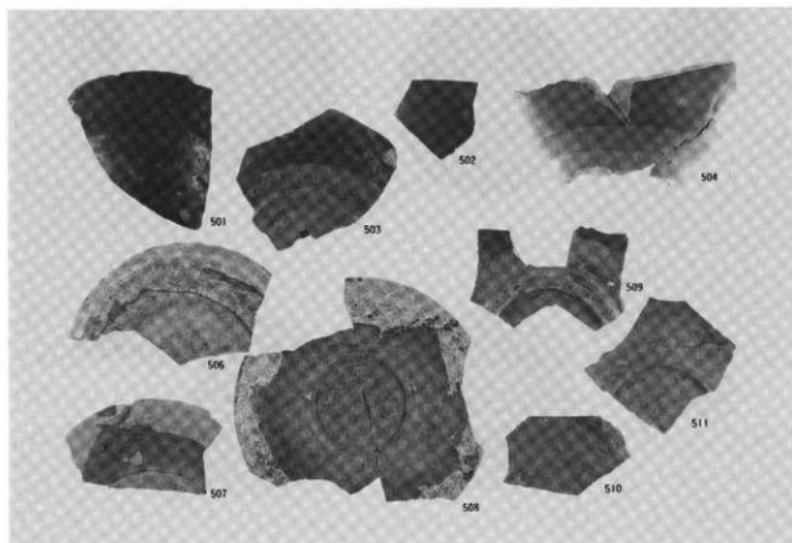
1. 白磁



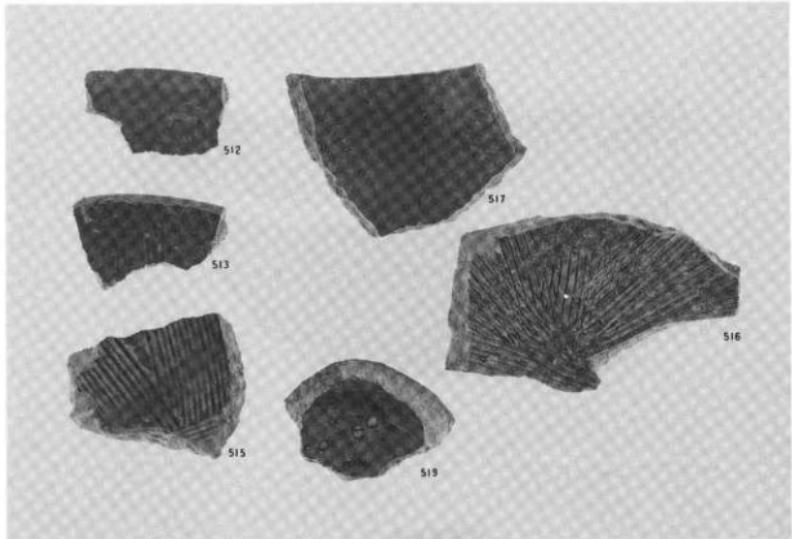
2. 伊万里、瀬戸黒瀬



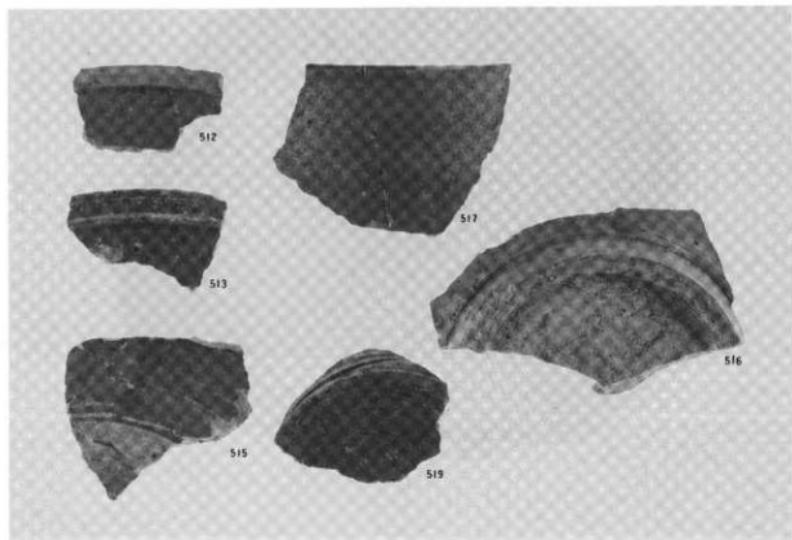
1. 越中瀬戸（内面）



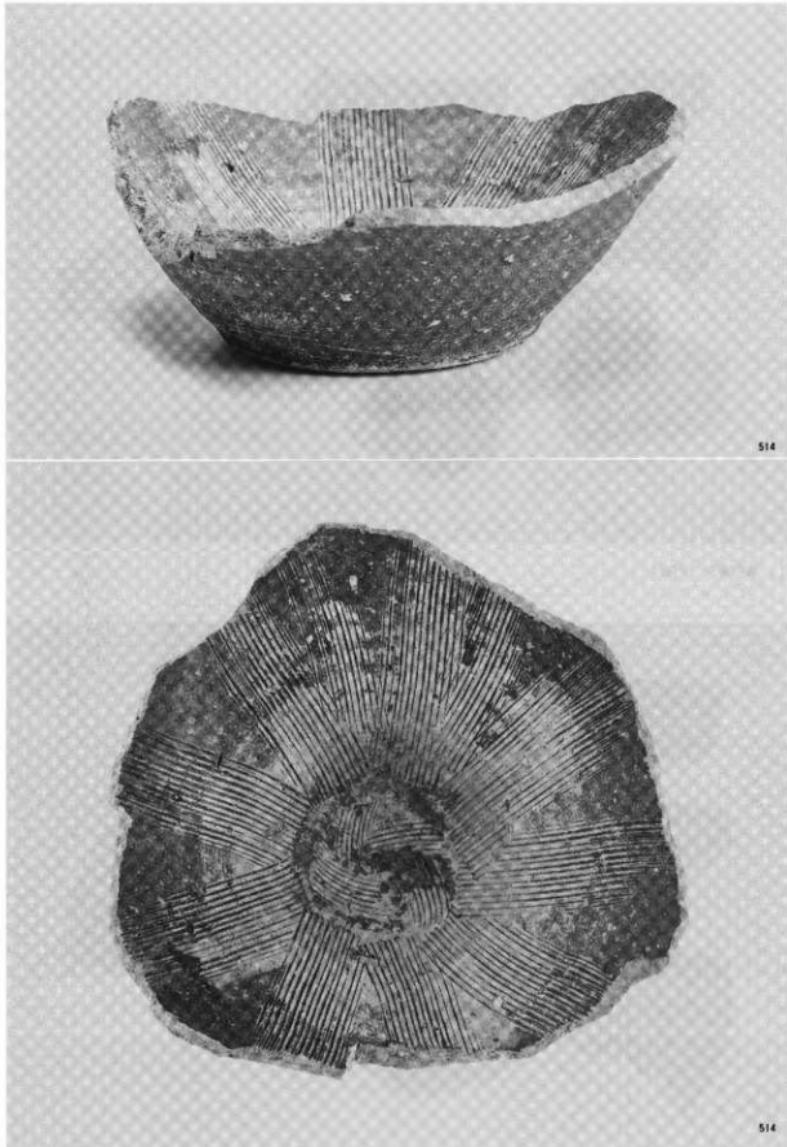
2. 越中瀬戸（外側）



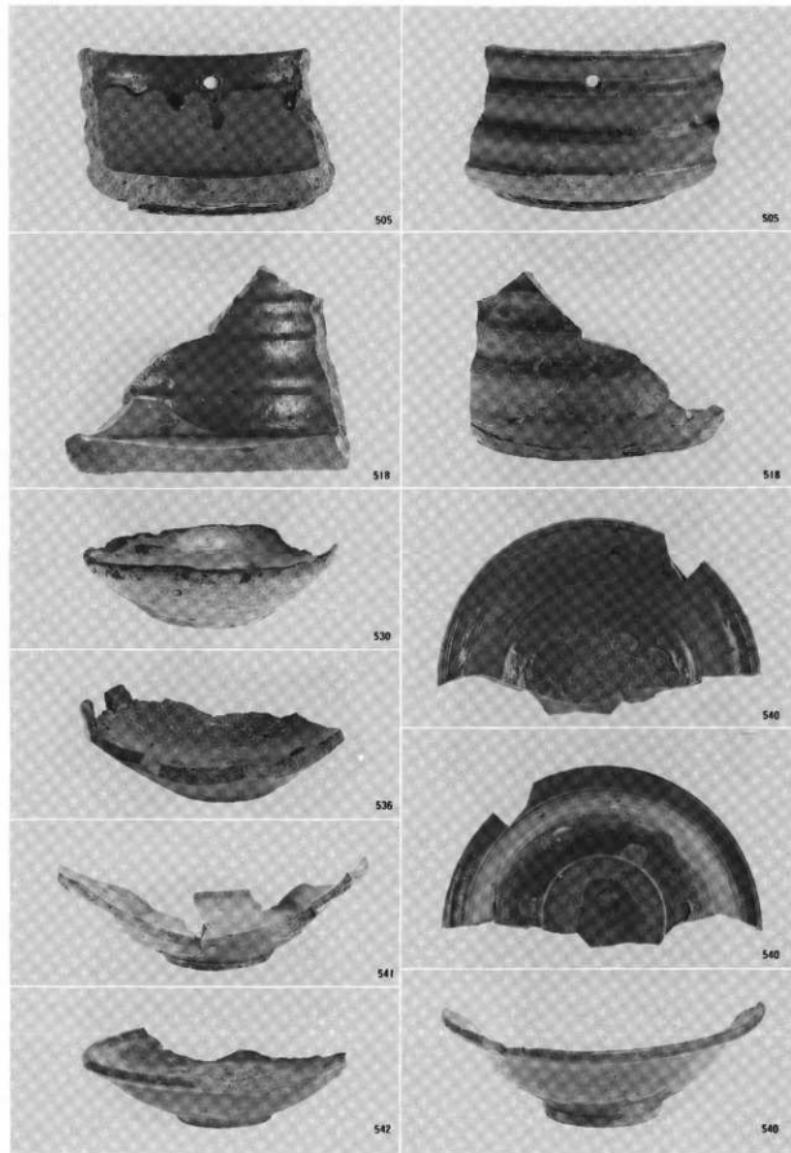
1. 越中瀬戸（内面）

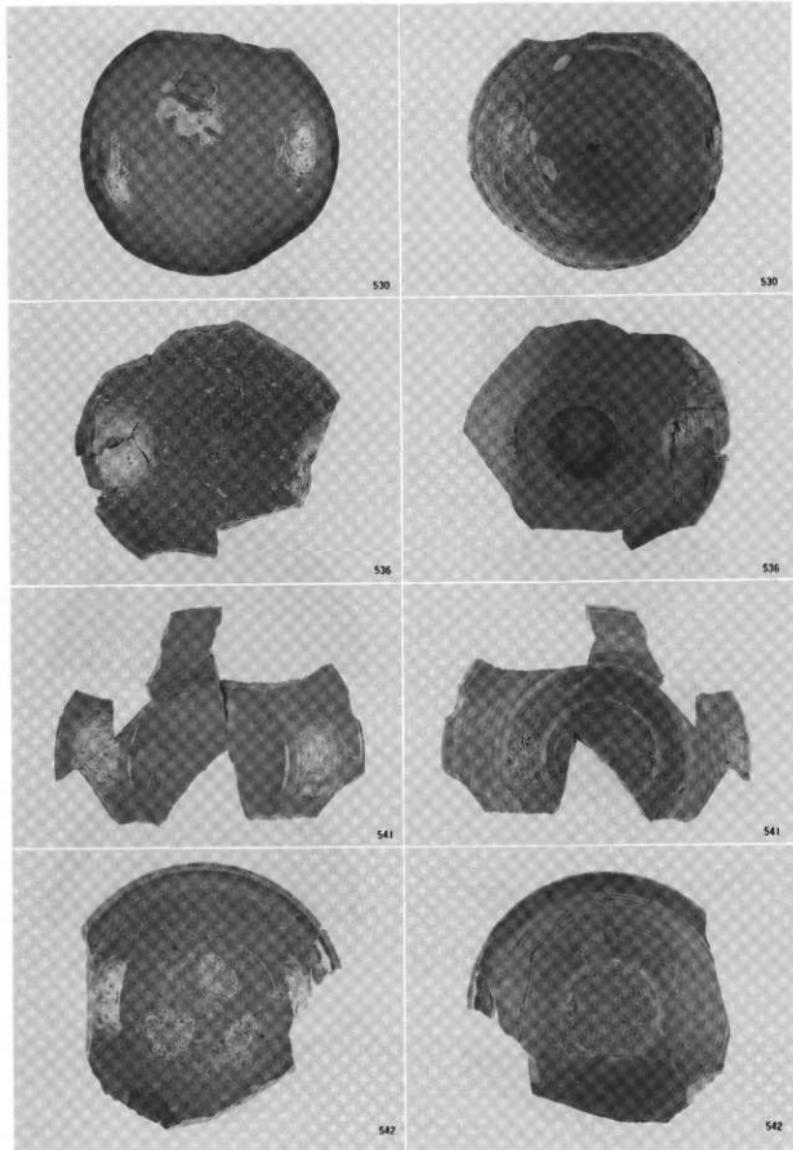


2. 越中瀬戸（外面）

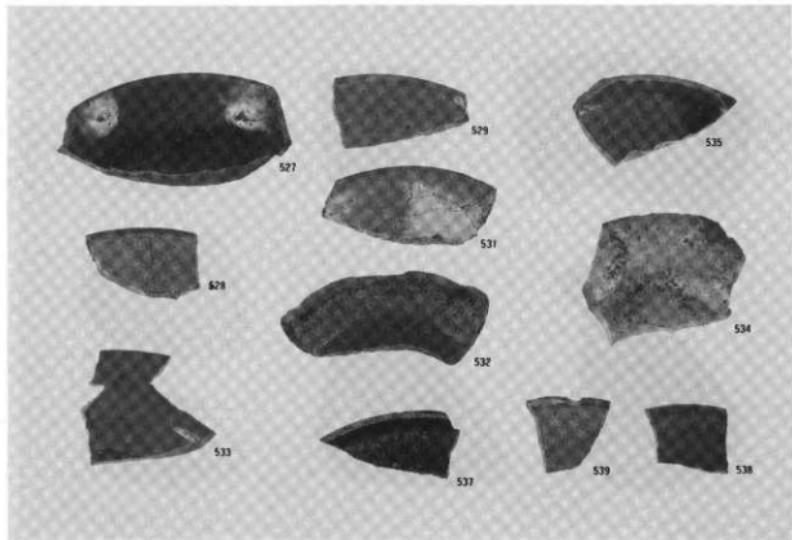


越中瀬戸

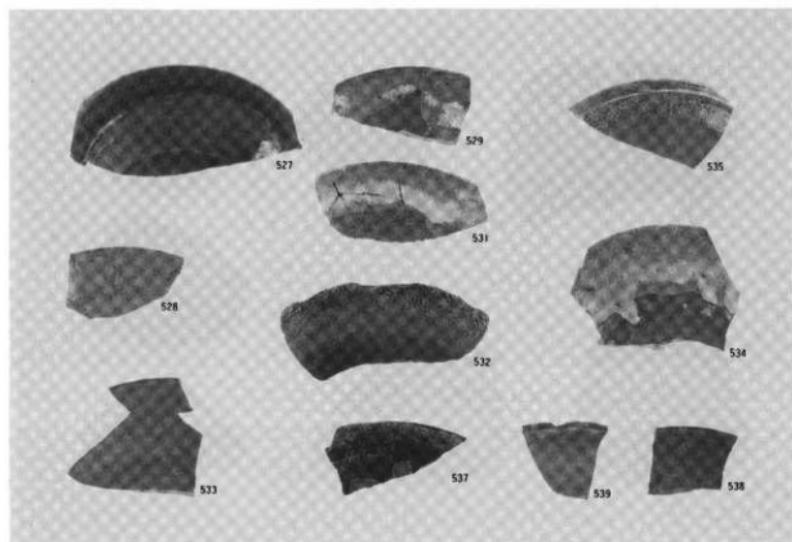




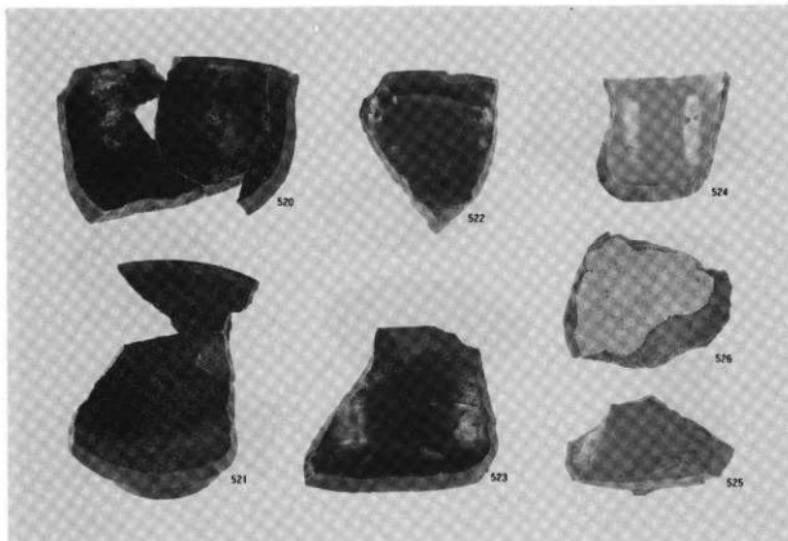
唐津



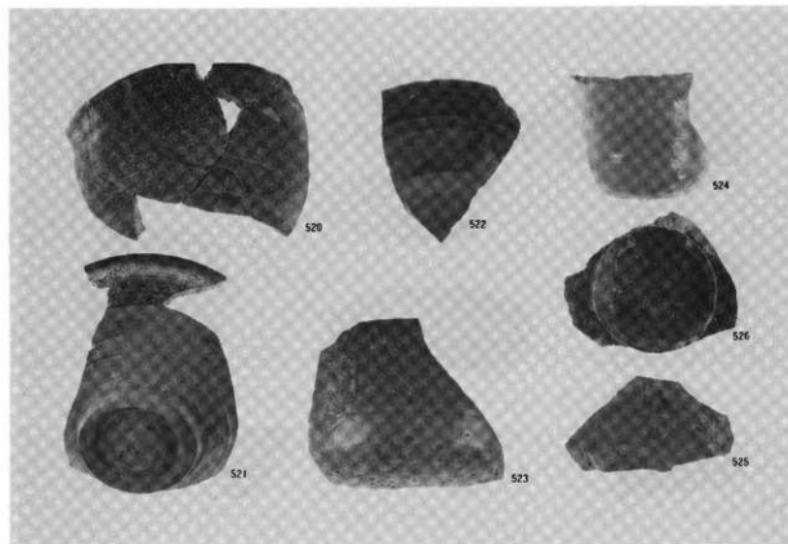
1. 唐津（内面）



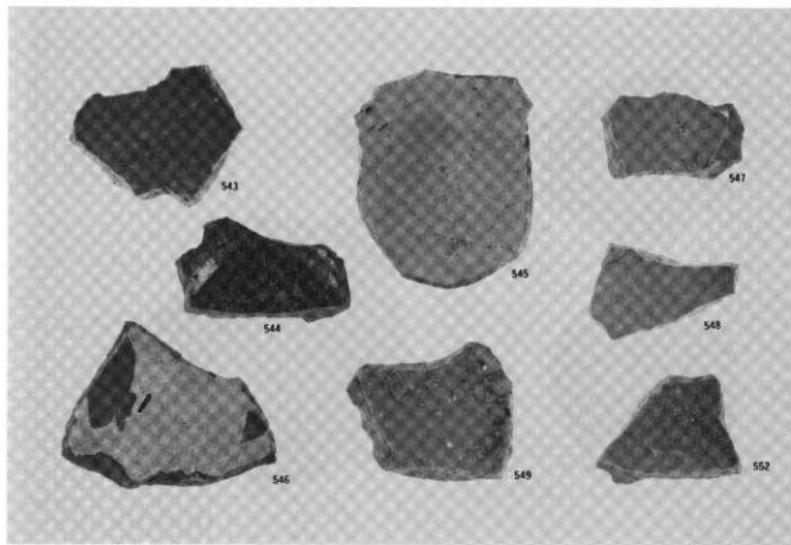
2. 唐津（外面）



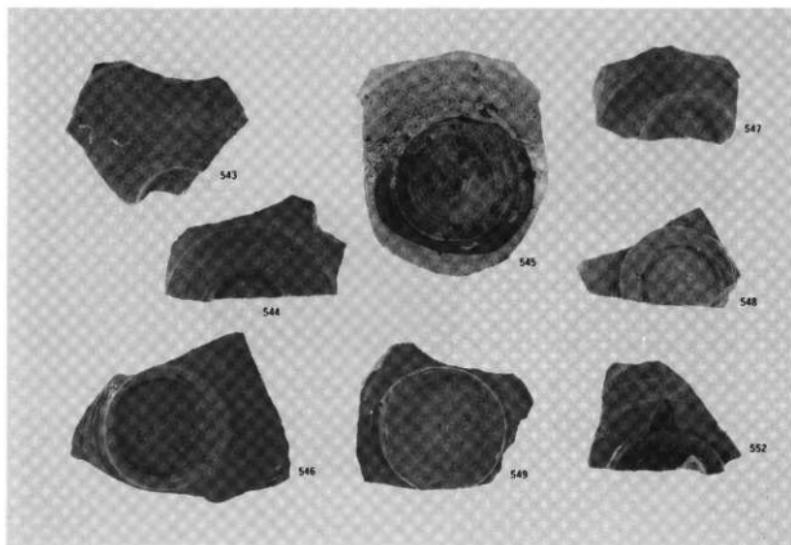
1. 唐津（内面）



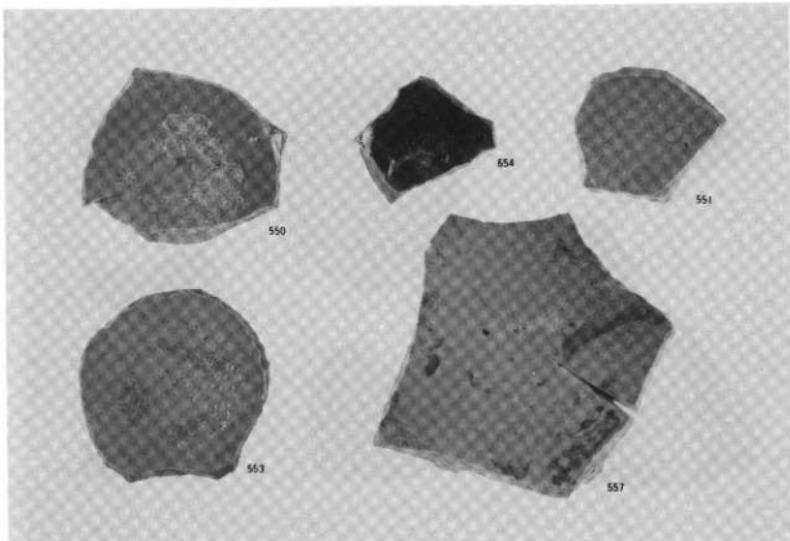
2. 唐津（外面）



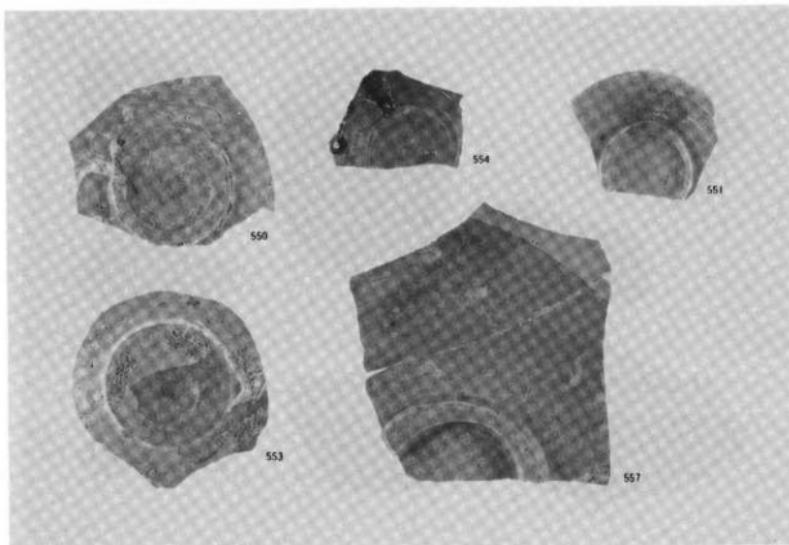
1. 唐津（内面）



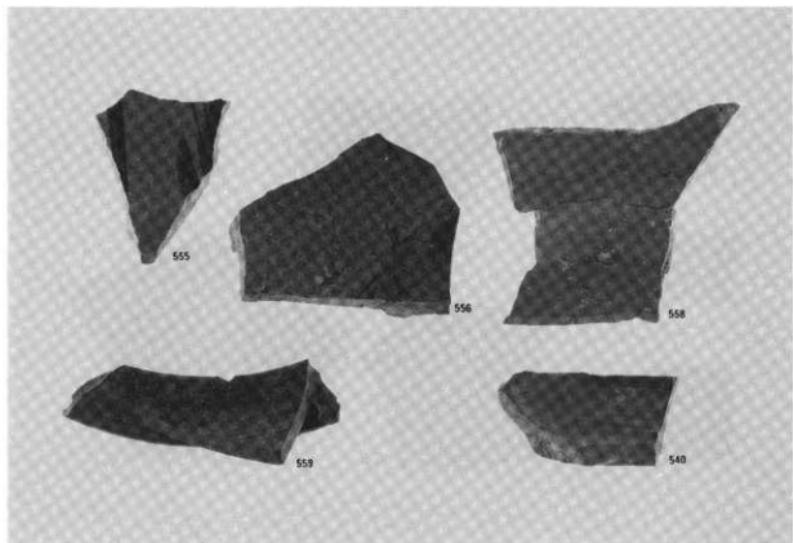
2. 唐津（外面）



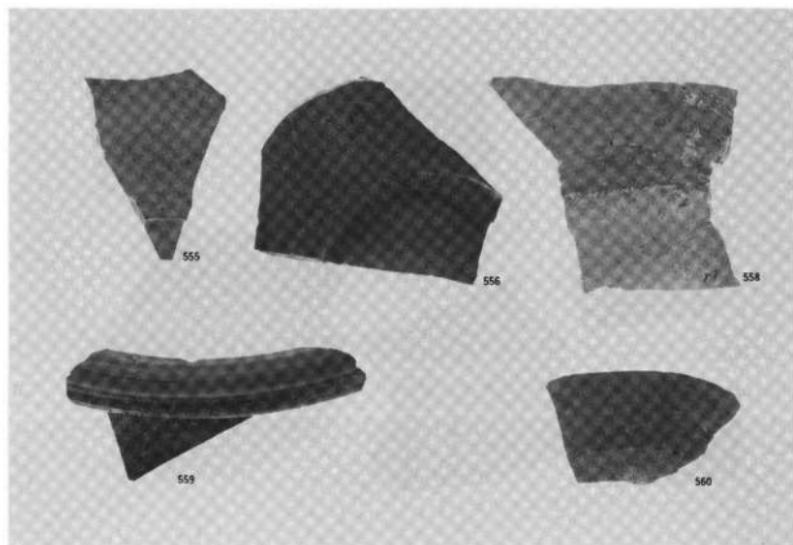
1. 唐津（内面）



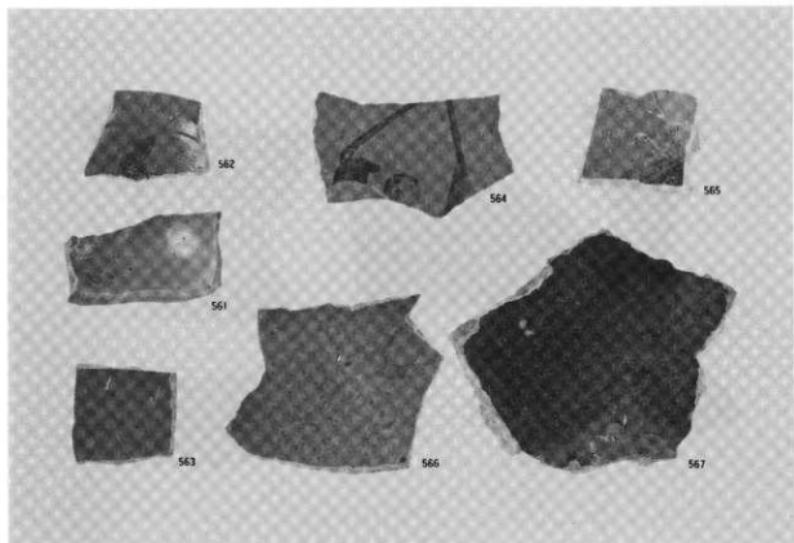
2. 唐津（外面）



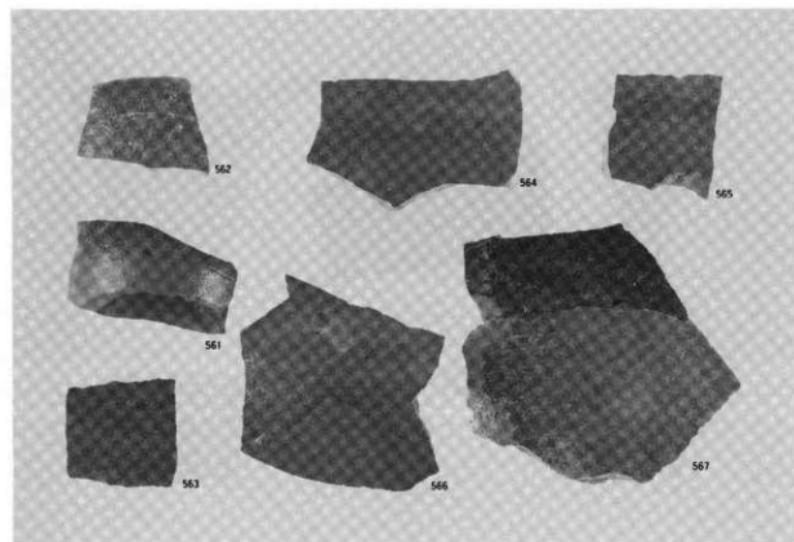
1. 唐津（内面）



2. 唐津（外面）



1. 唐津（内面）



2. 唐津（外面）

---

高岡市埋蔵文化財調査報第32号

越中國府関連遺跡調査概報VIII

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

1996年3月29日

印刷所 平田印刷株式会社

富山県高岡市野村1485番地

---